

文部省檢定濟

3759
Salu
資料室

普通心理學

小佐藤川正
原助市郎
共著

修訂版

東京寶文館藏版

41188

教科書文庫

4

130

51-1921

20000
22310

71

120

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

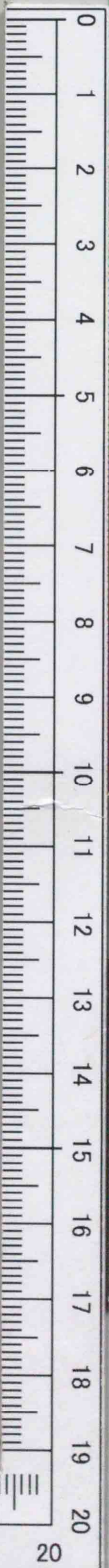


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
130
51-1921
2000022310

資料室

395.7
Sa19

日一廿月一年十正大

濟定檢省部文

小佐藤川正行
市郎
共著
普通心理學

修訂版

東京寶文館藏版

広島大学図書
2000022310





凡 例

一、本書は師範學校に於ける教育科特に尋常小學校本科正
教員の養成を目的とせる教育科の教科書となさんがた
めに編纂せるものゝ一部なり。

一、本書の編纂に當りては著者は最も他の各分冊との連絡
に意を用ひ、互に相補益して、生徒の理會を容易ならしめ
んことを務めたり。

一、本書は心理學の概要を平易簡明に敘述し、且各章の終に
於て教育上の應用を附説して、心理學に關する一般の知
識を與ふると共に、又教育に對する興味を起さしめんこ
とを期せり。

一、本書に敘述せる事項につきて、尙其の詳細を窺はんとす

るものは著者の別に編せる新撰心理學を参照せられんことを望む。

大正元年十月

著者識

修訂版緒言

一、本書は曩に發行せる普通心理學を、其の後に於ける教授の經驗と、本書を使用せる教育家諸氏の忠言とに基づきて修訂を加へたるものなり。

一、修訂に方りては、兒童教育上重要な關係を有するものを比較的に精敍するの方針を取り、又各章節に於て兒童心理の概要を加へたり。従つて神經生理の如く、別に生理學に於て學ぶべき部分、及び感覺、單一感情の如く、實驗的研究の結果は豊富なれども、實際の教育に影響すること尠き部分は止むを得ず、なるべく之を略述せり。時間の餘裕ある場合には教授者に於て適宜に

補説せられんことを望む。

大正九年九月

著者 識

普通心理學 修訂版 目次

緒論

第一章 心理學の任務……………一

第二章 心理學研究の方法……………三

本論

第一篇 心的現象汎論

第一章 心的現象の生理的基礎……………六

第一節 神經原……………七

第二節 神經系統……………八

第二章 意識及び注意……………一〇

第一節 意識……………一〇

第二節 注意……………一二

第三章 心的現象の分類

第二篇 知的現象

第一章 感覺

第一節	感覺の意義及び分類	一〇
第二節	皮膚の感覺	二〇
第三節	味覺及び嗅覺	二二
第四節	聽覺	二三
第五節	視覺	二四
第六節	運動感覺	二七
第七節	有機感覺	三一
第八節	感覺と教育	三二
第二章 知覺		
第一節	知覺の意義	三四
第二節	空間知覺	三七

親友の森
表境

第三節	錯覺及び幻覺	三九
第四節	知覺と教授	四一

第三章 表象

第一節	表象の意義 <small>(觀念)</small>	四三
第二節	表象型式	四四
第三節	表象の再現——觀念聯合	四六
第四節	記憶	五〇
第五節	想像	五四

第四章 思考

第一節	概念	五八
第二節	斷定	六四
第三節	推理	六七
第四節	言語	七四
第五節	兒童の思考	七六

第六節 思考作用と教授……………六

第三篇 情的現象……………八〇

第一章 單一感情と複合感情……………八〇

第二章 情緒……………八三

第三章 情操……………八六

第四章 感情の教育……………九四

第四篇 意的現象

第一章 反射運動と本能……………九七

第二章 衝動と欲望……………一〇一

第三章 執意……………一〇三

第四章 習慣と品性……………一〇六

第五章 作業と疲労……………一〇八

第六章 意志の教育……………一一

餘論

第一章 兒童心身の發達……………二七

第一節 發達期の區分……………二七

第二節 身體の發達……………二八

第三節 精神の發達……………三三

第二章 個性及び人格……………三四

普通心理學修訂版目次終



普通
心理學 (修訂版)

緒論

第一章 心理學の任務

心理學の任務

心理學は心的現象を研究する科學なり。
宇宙間の現象は多種多様なりと雖も、之を大別して心的現象及び物的現象の二種となす。物的現象は或は之を自然現象とも稱し、例へば火の燃え、水の流れ、日月の運行するが如く、外界に現はるゝ事物の生起・變化を總稱し、之を研究する科學を自然科學といふ。然るに心的現象は之に反し、吾人

の最も直接に經驗する内界の出來事にして、喜怒哀樂の情を始めとし、事物を知り、之を記憶し、又は之を欲求するが如き何れも是に屬す。心理學は是等心的現象を以て研究の對象となし、心的現象の何たるかを究め、其の間に存する法則を求め、更に進んでは其の生起及び發達の状態を明らかにする所の學問なり。

心理學は斯く心的現象を研究する科學なるを以て、倫理學・社會學等を始めとし、苟も精神に關係ある一切の科學は悉く其の補助を心理學に仰がざるはなし。殊に教育學は人の精神を完全に發達せしむるの道を講究する學なれば、其の方法を定むる上に於て、常に心理學の所説に注目し、之を活用することを怠る可からず。心理學の教育者に必要なる所以實に此に存す。

心理學と他の科學との關係

第二章 心理學研究の方法

科學の研究

凡そ科學の研究は、先づ研究せんとする事實を觀察、實驗し、次ぎに是等の觀察及び實驗によりて得たる結果に基づきて種々の推究をなし、事物相互の間に存する法則を發見し、最後に、此の法則の確否を證明することを要す。即ち科學の研究は觀察及び實驗に始まり證明に終るものとす。而して心理學に於ける觀察及び實驗は之を左の三種に區分するを常とす。

内省法

一、内省法 研究者が直接に自己の心狀を觀察するものにして又之を主觀的觀察法といふ。此の方法は心理學に特有のものにして、心に關する一切の研究の基礎なり。蓋し、他人の心意を觀察し、其の状態如何を考究するは、畢竟内省法

客觀的觀察法

によりて得たる知識に基づき、之より類推するの外なければなり。

二、觀察法 他人の容貌態度・言語・動作等を觀察し、引いて其の精神狀態如何を究むるを觀察法といふ。此の方法は適用の範圍極めて廣く、獨り現在の人に接して行ひ得るのみならず、又肖像・傳記・著書等によりて現に存在せざる人の精神にも及ぼすことを得べし。殊に兒童は其の性質無邪氣にして、故らに隱蔽すること少きものなれば、其の適用比較的容易なりとす。

實驗法

三、實驗法 實驗法とは一定の目的の下に一定の事情を構成し、此の事情の下に起る心的現象を研究する方法なり。此の方法は輓近に於て頗る長足の進歩をなし、専ら實驗に基づきて立てられたる**實驗心理學**なるものすら成立する

に至れり。實驗法は之を以上の二方法に比すれば、比較的確實なる結果を得るの長所ありと雖も、之が爲に種々複雑なる装置を要すること多きを以て、主として専門の學者により用ひらるべきものなりとす。

本論

第一篇 心的現象汎論

第一章 心的現象の生理的基礎

心身の相關

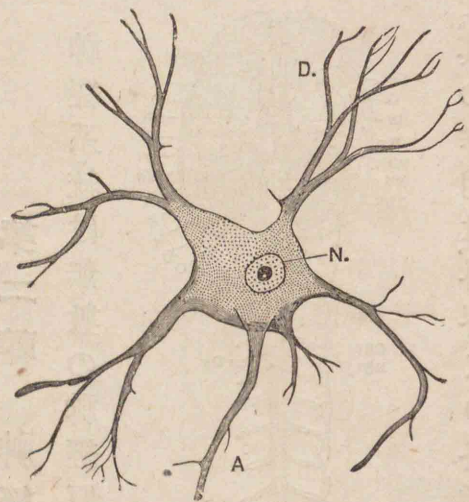
古語に曰く「健全なる精神は健康なる身體に宿る。」と。精神と身體とが密接なる關係を有し、交互に相影響するものなることは、何人も日常經驗する所にして、故らに詳説するを要せざるべし。殊に神経系統と精神との關係は最も緊密なるものなれば、苟も精神状態につきて研究せんとするものは、先づ神経系統の何たるかに、つき、其の概要を理會せざるべからず。左に之を略説すべし。

神経原

第一節 神経原

神経系統を構成する所の單位を神経原と稱し、之を細胞と纖維との二部に分かつ。

細胞は外圍に柔軟なる膜を被り、内に原形質より成れる粘液を含む。粘液の中には核あり、核の中には一個乃至數個の仁を有す。神経纖維に二種あり、其の一を軸索突起といひ、他を樹枝状突起といふ。軸索突起は即ち普通に神経纖維と稱せらるゝものにして、一の神経原に於ける軸索突起は他の神経原の樹枝状突起と交互に相接



脊髓前根に於ける神経細胞
 A 軸索突起
 D 樹枝状突起
 N 核

末梢神經と中樞

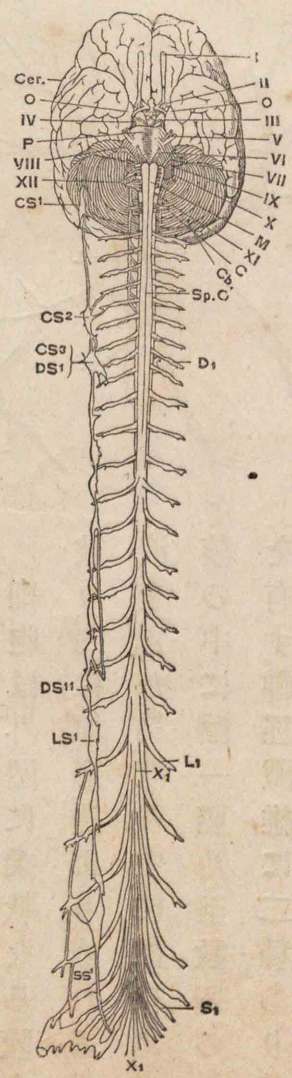
神經系統

Cer 大腦
 P 嗅覺中樞
 O 視神經
 M 延髓
 Cb 小腦
 SP 脊髄
 I 第一頸椎神經
 II 第二頸椎神經
 III 第三頸椎神經
 IV 第四頸椎神經
 V 第五頸椎神經
 VI 第六頸椎神經
 VII 第七頸椎神經
 VIII 第八頸椎神經
 IX 第九頸椎神經
 X 第十頸椎神經
 XI 第十一頸椎神經
 XII 第十二頸椎神經
 D 第一腰椎神經
 L 第一腰椎神經
 S 第一薦骨神經
 X 尾閥骨神經
 CS 脊髄交感神經節

して、連絡を保ち、以て、興奮を一定の方向に傳達す。

第二節 神經系統

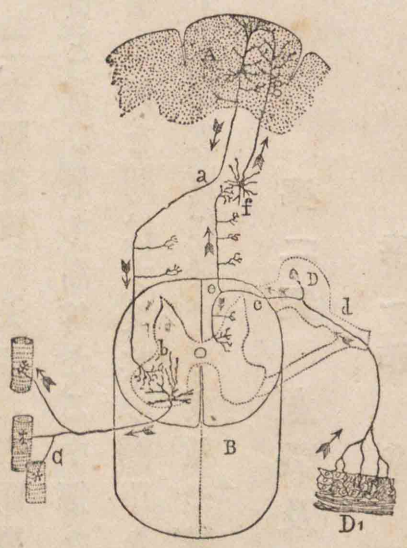
神經系統は無數の神經原の相結合して成れるものにして、



て、其の作用は、外界より各種の刺激を受容し、之に應じて一定の運動を引き起すにあり。其の中、外より刺激を受容し、又は内より興奮を身體各部の筋肉に傳ふる部分を末梢神經と言ひ、此の二者を連結し、適當に之を調節する部分を中樞

刺激と運動との連絡圖式

DD 末梢神經節
 c 脊髄後根
 e 脊髄下行分岐點
 f 神經細胞
 g 大腦皮質
 Δ 錐狀細胞
 a 同上軸索突
 Cb 脊髄前限
 末梢運動關機



といふ。故に中樞と末梢神經との關係は之を電話交換局と通話線との關係に比するを得べし。末梢神經中、外より刺激を受容するものを感じ神經となし、内より興奮を傳ふるものを運動神經となす。中樞は又之を其の作用の複雑なるか否かにより脊髄延髓・小腦の如き下等中樞と高等中樞即ち大腦皮質とに區分す。

一、脊髄・延髓及び小腦 熱

手を引くは脊髄の營む反射作用にして、強き光線に對し、瞳孔を縮小するは延髓の反射作用なり。此の如く脊髄及び延髓は自ら中樞となりて諸種の反射作用を營む外に、又、外來

の刺激を高等中樞に傳へ、及び高等中樞の興奮を運動神経に傳達するの媒介をなす。然るに小腦は稍之に異なり、其の作用は専ら身體の運動の調節を圖るにあり。

二、大脳皮質　大脳の表面縦横に婉廻せる皺襞を大脳皮質と言ひ、最も高等なる中樞なり。凡て意識の作用は其の種類如何を問はず、又其の簡單なると複雑なるとに論なく、必ず、大脳皮質に於ける或種の變化を伴ふものとす。

第二章　意識及び注意

第一節　意識

意識の事實

醒覺せる時に於ける心の状態を總稱して意識と言ひ、熟睡若しくは失神せる場合の如く、全く覺えなき状態を無意識といふ。眠に入る場合につきて見よ、意識に無數の段階ありて、次第に明瞭の度を減ずること、猶日光の次第に薄らぎて暗黒に至るが如けん。意識より無意識に至る過渡の状態を半意識と稱す。例へば將に眠に入らんとする時の精神状態の如し。

意識の性質

同一時に於ける意識の内容は雜多なれども、一々孤立することなく、相互に聯絡を保ち、常に一定の中心に向つて統一せらる、之を意識の統一性といふ。意識は、又一瞬時も固定することなく、甲より乙、乙より丙と、一定の聯絡を保ちながら絶えず變化す。是れ心的現象と物的現象とを分かつ根本性の一にして、之を意識の連續性といふ。意識は斯く變化しながら、しかも相連續するを以て、或學者は之を河水の流れに比し、意識流と稱せり。意識流の各瞬間に於ける意識全體を識野といふ。

注意の意義

第二節 注意

同一意識に於ける多くの心的現象は其の明瞭の度同じからず。視野は宛も視野の如し。視野に現はるゝ多くの事物中、諦視點に當るもの最も明瞭に見え、之を遠ざかるに従ひ、次第に不明瞭となるが如く、意識に於ても、其の一局部の特に明瞭なるを常とす。斯く意識の一部をして特に明瞭ならしむる心的作用、換言すれば或事物に向つて特に心的勢力を集中する活動を注意といふ。されば注意を比喻的に解して、或は意識の視點又は焦點といふことあり。

注意の種類 注意には有意注意、無意注意の二種あり。

無意注意

無意注意 無意注意とは對象に誘はれて、自ら之に注意するものにして、例へば麗はしき草花を見、又は強き砲聲を

無意注意の條件

聞くときは、覺えず之に注意するが如し。無意注意を惹起する條件は大凡左の如し。

- 一、刺激の強大なること。されど弱小なるものも時としては對比によりて注意を惹き易きことあり。例へば五號活字の間に交れる六號活字の却つて注意を惹くが如し。又強大なる刺激も之に慣るゝときは終に、毫も注意を喚起せざるに至る。

- 二、刺激の急激に来るか、又は其の運動すること。

- 三、刺激の新奇なるか、又は變化あること。

- 四、快苦の感情に觸るゝこと。

- 五、自己の利害に關係あるものなること。

- 六、已有の知識と關係を有するものなること。

有意注意

有意注意 或目的の爲に、興味なきものにも、進んで注意

豫期注意

するを有意注意といひ、一般に努力の感を伴なふ。而して此の努力の感は同一注意の反復と共に次第に減少するものなれば、其の始め大なる努力を要せしものも、練習を積むに従ひ、自然に注意するに至り、先の有意注意は變じて無意注意となることあり。之を第二次無意注意といふ。

有意注意の一種にして、將に起らんとする事物を豫め心中に期待して、之に注意するを**豫期注意**といふ。體操の號令を下すに當り、豫令と動令との間に多少の時間を置くが如きは、即ち豫期注意の作用を利用せるものなり。

注意の律動

注意の律動 吾人は同一事物に對して長く注意を持続すること能はず。殊に兒童に於て然りとなす。又假令、注意は持續すとすも其の強度は必ずしも一樣ならず、一定の時間を隔て、昇降するものなり。之を**注意の律動**といふ。斯く

同一刺激に對する注意の持續は極めて短きものなれば、苟も長く兒童の注意を把握せんとするものは、力めて變化ある教授をなさざるべからず。中にも教師の言語は最も心を用ゐる單調に失せず、平板に流れず、抑揚高低其の度に合せんことを要す。

注意の範圍

注意の範圍 注意の範圍とは同時に注意し得べき事物の數にして、實驗によるに、四個乃至六個の黑點は同時に之を認識することを得。されど若し、注意すべき事物相互の間に連絡の存するときは其の範圍は更に擴大すべし。例へば語を構成する文字に於ては、能く「意味なき綴り」の三倍に相當する字母を同時に認むることを得といふ。されば兒童の眼前に提出する事物はなるべく連絡を有し、何等の關係なきものを同時に示すが如き事あるべからず。

兒童の注意

兒童の注意 幼兒の注意は主として感覺的事物に對する無意注意にして、且外界の刺激の變化に伴なひ、絶えず動搖するを常とす。新たなる作業に對する順應は甚だ遲緩にして、持續性を缺き、疲勞亦速なり。されど大凡就學期の前後より有意注意徐々に發達し、教師の適當なる指導により、興味少き事物にも注意し得るに至る。

注意と教育

注意と教育 注意は學習の第一要件なり。今以上敘述せる所に基づき、更に教育上必要なる事項を約説すれば左の如し。

一、兒童の注意發達の度に適應すべし。幼少なる兒童に強ひて有意注意を起さしめんとする如きは固より不可なりと雖も、其の發達するに従ひ、次第に有意的に注意するの習慣を養ひ、自助奮勵の氣風を鼓舞せざるべからず。

二、巧みに無意注意の條件を利用し、興味あり又變化に富める教授をなさるべからず。

三、兒童の周邊に留意し、其の注意を攪亂する事物を除去すべし。

四、兒童の姿勢に注意し、長く同一の位置にあらしむることなく、或は時に深呼吸をなさしめ、或は時に休息をなさしめ、力めて其の倦怠を防ぎ、生理的方向より注意を助長する方法を講ずべし。

心的現象の分類

第三章 心的現象の分類

心的現象は通常之を知・情・意の三者に區分す。知とは事物を認識する方面にして、事物を知り、之を記憶するが如き作用を指し、情とは快苦を感ずる方面にして、喜怒・哀樂・愛憎の

心の三性質

如きもの之に屬し、意とは事物を欲求し、事業を決行するが如き精神の發動的方面を總稱す。されど他面より考察するときは、此の三者は頗る密接なる關係を有し、決して截然たる分界を定め得べきにあらず。凡て精神活動は其の種類の如何を問はず、必ず常に知情意の三作用を含むものにして、唯其の中、主要なる要素によりて、或は之を知といひ、情といひ、意といふのみ。例へば沈思默考して學理を討究するは主として知的現象なれども、又同時に難易に對する快不快の意識及び努力して之を解決せんとするの意志を起し、苦痛の感は主として情的現象なれども、同時に苦痛の原因を知り、之より避けんとする意的作用を伴ふが如し。されば知情意の三者は畢竟同一精神活動の三方面と見るべきものにして、苟も其の一あらんか、必ず、他の二者の共働せずと言

ふことをし。即ち心的現象を知情意の三者に區分するは、例へば生物を動物と植物とに分かつが如きものとは、全く其の趣を異にせりと言はざるべからず

第二篇 知的現象

第一章 感覺

第一節 感覺の意義及び分類

感覺の意義

身體の内外に於ける刺激によりて生じたる最も簡單なる心的現象を感覺といふ。感覺の發生には次ぎの三條件を必要とす。

- 一、光・音・熱の如き一定の刺激の存在、
 - 二、目・耳・皮膚等の感覺機關に存する末梢神經の興奮、及び之を中樞に傳達すること、
 - 三、大腦皮質に於ける感覺中樞の興奮、
- 感覺の分類につきては學者の説く所一定せずと雖も、吾

感覺の分類

分類

皮膚の感覺の區分

壓覺

人は感覺を惹起する刺激の種類を標準とし、其の身體の外部に起るか、又は身體の内部に起るかによりて、之を左の如く分類せんとす。

- 一、外的刺激によりて生ずるもの。
 - 一、皮膚の感覺
 - 二、味覺
 - 三、嗅覺
 - 四、聽覺
 - 五、視覺
- 二、内的刺激によりて生ずるもの。
 - 一、運動感覺
 - 二、有機感覺

第二節 皮膚の感覺

皮膚の感覺は通常世人の觸覺と稱するものにして、分かつて壓覺・溫覺・冷覺及び痛覺の四種となす。

壓覺 壓覺は皮膚に存する壓點を刺激するによりて生ずる感覺にして、其の銳鈍は皮膚の部位によりて異なり。前

温度感覺

皮膚の感覺を司る種々の小體

A パチニ小體
B 小體
C 氏小體
TAX 末端球
結締組織



額・顳部最も鋭く、指爪・踵等は最も鈍し。

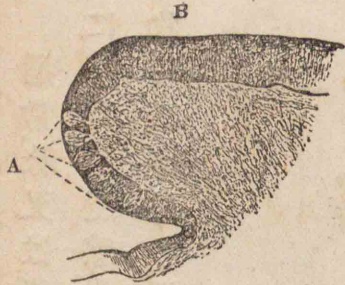
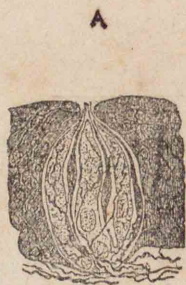
温度感覺及び冷覺 皮膚の表面にある温點又は冷點を刺激するときに生ずるものにして、温點は温を感じ、冷點は冷を感じ、即ち温覺及び冷覺は心理上全く別種の感覺なり。

一定の皮膚の一定時に有する温度を其の生理的零點と稱す。生理的冷點より高き温度は之を温と感じ、低きときは冷と感ずれども、之と同一の温度は何等の感覺をも生ずることなし。而して生理的零點は或程度迄、外圍の温度に順應して昇降するものなれば(温度感覺の順應性)同一の温度にても皮膚の順應状態如何により或は温覺を生じ、或は冷覺を生ず。室内に於ける同一温度も時としては或

痛覺

味覺の機關
A 味覺
B 輪郭狀突起の終端(味覺を示す)

味覺



は温かに或は冷かに感ぜらるゝは是が爲なり。

痛覺 皮膚の表面にある痛點を刺激するによりて生ずる感覺にして、一般に不快の感を伴ふ。而して何れの感覺も強度激烈なるときは終に痛覺を生ずるに至るを常とす。

痛點の分布は甚だ密にして、感受性鋭く、且種類の如何を問はず、凡ての強刺激に感應するものなれば、身體の危害を豫告し、警戒を與ふるに於て頗る重要な關係を有す。

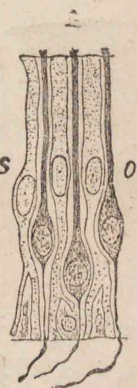
第三節 味覺及び嗅覺

味覺 諸種の溶液が舌面、軟口蓋等に分布せる味細胞を刺激するとき生ずる感覺にして分かつて甘・酸・苦・鹹の四種とす。

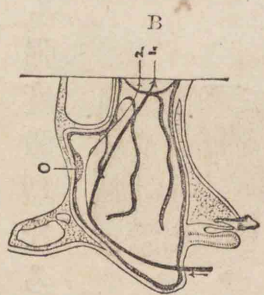
嗅覺

嗅覺の機關

嗅細胞の支那細胞の通常呼吸の通路の空氣の通過の強弱の時の通過



なり。



りて、堇の香、梅の香等に分かつに過ぎず。

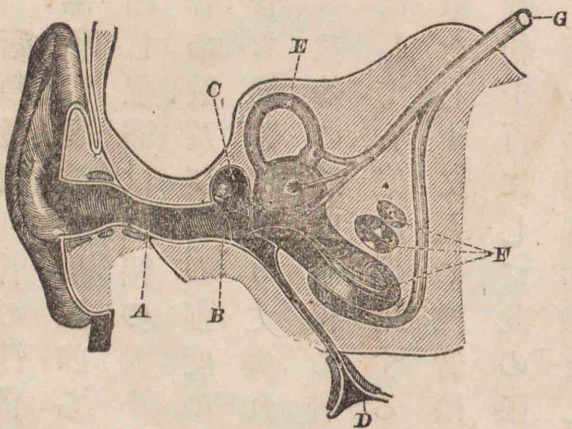
第四節 聽覺

聽覺

聽覺の機關

外聽道 鼓膜 中耳 耳蝸 耳管 耳蝸管 聽神經

音の種類



音は主として樂音にして、木枯らしの音、紙の破るゝ音の如

聽覺は音響の内耳に於ける聽神經を刺激するとき生ずる感覺にして、其の生起の次第をいへば、空氣の振動耳殼に入るや、外聽道を経て鼓膜を振動せしめ、次に中耳内の小骨内耳の淋巴液に傳はり、終に蝸牛殼内にある聽神經を刺激す。而して聽神經は此の興奮を大脳の聽覺中樞に致し、茲に聽覺を生起す。

音の種類

音は之を樂音と噪音とに區別す。前者は規則正しき振動より起り、後者は振動不規則なるときに生ず。樂器より出づる

音の性質

きは噪音なり、
音の性質 音の性質には高低・強弱及び音色の三者あり。高低は音波の長短即ち一定時に於ける振動数の多少に起因し、強弱は振幅の大小に基づく。又音色は主音に伴ふ副音の數及び其の強度の差によりて生ずるのにして、同一の音も樂器によりて夫れ夫れ音色を異にす。

我等の聽取し得る音は一秒時の振動數十六乃至四五萬にして、音樂に使用するものは通常六十四乃至五千の振動數を有す。又人の聲音は最低音の振動數一秒時約三百、最高音約千百にして、此の限界内を聲域といふ。

種々の樂音相融合して、快感を起すときは之を調和音といひ、之に反して、不快感を與ふるときは之を不調和音といふ。何れの樂器にても、オクターブ最も良く調和し、十二度之

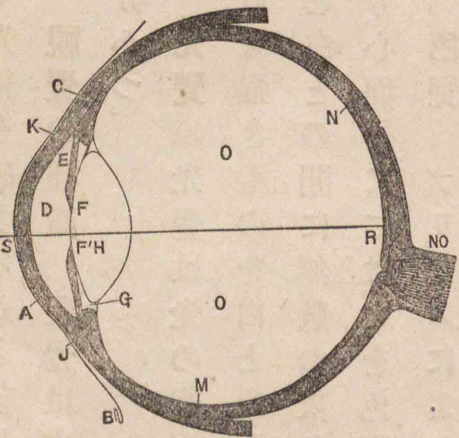
調和音と不調和音

に次ぎ、五度又之に次ぐ。

第五節 視 覺

視覺の機關

RRNONM KJHGFEDCBA
SO F
中視視網脈角毛水後瞳紅前鞏結角
央軸神子膜絡境角毛水後瞳紅前鞏結角
小窩經體膜 膜標晶房孔彩膜膜膜



中央小窩といふ。されば若し物體を明視せんとするときは、其の映像をして中央小窩の上に来らしめざるべからず。是

視覺 は光線の刺激によりて生ず。光線、眼に入るや、水晶體・硝子體等を通過して、網膜に達し、茲に分布せる視神經を刺激す。而して此の視神經の興奮の大脳視覺中樞に傳はるときに生起する感覺を視覺となす。網膜の中最も明瞭に事物を見ることを得る部分を

れ眼球の運動の必要なる所以にして、三對の動眼筋之を司
どる。又視神經の網膜に入り來る部分は之を盲點といひ、全
く光線を感じること能はず。

視覺の種類 視覺は之を光覺(無色覺)と色覺との二種に
分かつ。

光覺 光覺は光の強弱によりて生ずる感覺にして、光の
最も強きものを白となし、其の全くなきものを黒となし、黒
と白との間に無數の灰色あり。光覺は俗に色と稱せらるゝ
も、心理學にては、之を色彩の中に數へざるを常とす。

色覺 プリズムによりて太陽の光線を分析すれば、赤・橙
・黄・綠・青・藍・堇の七色を得べし、是等の感覺を色覺といふ。吾人
の辨別し得る色は大凡一百五十種なるが、其中赤・綠・黄・青
の四色を以て原色となす。四原色以外の他の色は原色を種

光覺

色覺

補色

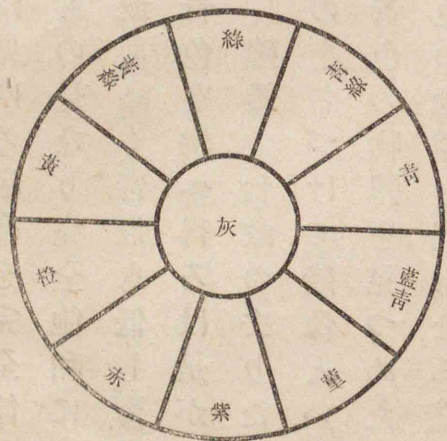
色圈

々に結合するによりて生ず。

補色 二色相合して灰色を生ずるときは、此の二色を相
互に他の色の補色なりと稱す。補色は其の性質全く反對の
色彩にして、其の重なるものを列
舉すれば左の如し。

- 赤—青綠、黄—藍青、橙—青
- 綠—紫、堇—黄綠

互に補色をなせる二色を接近す
るときは色彩の鮮明を増し、著し
く引き立ちて見え(對比の現象)又
赤と暗青色の如く補色に近き色
は最も能く調和す(色の調和)。故に繪畫・染物及び種々の裝飾
に於て補色の應用せる、範圍頗る廣し。



飽和

飽和 色は常に或度の光と結合して存するものにして此の結合の度を飽和といふ。光度適當にして、色の最も鮮明に見ゆる場合を完全飽和といひ、スペクトラムに現れたるもの是なり。完全飽和に要する光度は色によりて異なり、赤最も高く、青最も低し。薄暮に於て赤色の暗黒に變ぜし後、尙青色を辨へ得るは是が爲なり。

殘像

殘像 刺激の去りたる後、尙一定時間視覺の殘存するものを名づけて殘像といふ。松明を振り廻すとき火の輪を見、黄色の物體を見つめたる後、眼を灰色の背景に移すとき、黄色の物體と同形なる藍青色を見る如き是なり。驚盤活動寫眞等は此の理を應用せるものなり。

色盲

色盲 色彩の全部(全色盲)若しくは其の一部(部分色盲)を辨別する能はざるものを色盲といふ。部分色盲中多く存す

るは赤・緑二色を缺く赤綠色盲にして、稀には黄・青二色を缺く黄青色盲あり。色盲は多く先天的にして男子に多しといふ。色盲は船員・軍人・縫工等には不適當なれば、早く之を検出せざるべからず。

運動感覺

第六節 運動感覺

身體諸部を活動せしむるによりて生ずる感覺を廣く運動感覺と稱し、之を細別して隨意筋の運動によりて生ずる筋覺、關節の屈伸に伴なふ關節覺、及び腱の緊張によりて生ずる腱覺の三種となす。是等三種の感覺は通常相融合して感ぜられ、單獨に之を経験すること難し。例へば重き物體を扛ぐるときの感覺は、壓覺・腱覺及び關節感覺との融合より成るが如し。眼を動かして物體を見、耳を欬て、音響を聞く

ときは是等の感覺一層明瞭となる如く、凡ての感覺は運動感覺の補助により始めて精密に意識せらる、加ふるに此の感覺は書寫・談話・圖畫・手工等一切の技能の基礎をなすものなれば幼時より特に注意して練習を加へんことを要す。

第七節 有機感覺

有機感覺

有機感覺は消化・呼吸・血液循環等身體内部に於ける諸機關の作用に伴なひて生ずる感覺にして、又一般感覺とも稱す。其の内容概ね不明なれども、其の内若し強度の大なるものあるときは、其の要素に限り、明らかに意識せらる。例へば飢渴・嘔氣の如し。

有機感覺は味覺及び嗅覺と等しく知識の基礎としては價值乏しけれども、感情生活に影響すること甚だ大なり。彼

の氣分のよしあしと言ふものは即ち此の感覺に伴なふ不快の感情に外ならず。

第八節 感覺と教育

感覺機關の練習

感覺機關は知識の門戸にして、感覺は知識の第一の要素なり。而して感覺機關は練習によりて頗る鋭敏に赴くものなること、有名なる盲啞の婦人ヘレン・ケラーが、單に幼時より練習せる觸覺の助けによりて、能く高等なる學術を修得せしによりても明らかなり。加ふるに兒童は天性感覺機關を使用するを好み、色彩・音響等凡ての外來刺激に對して、著しき興味を有するものなれば、教育者は此の兒童固有の性向を利用し、夙に幼時に於て、感覺機關を練習し、知識の鞏固なる基礎を與へざるべからず。

感覺機關の養護

次に教育者は又能く感覺機關に關する理法に通じ、苟も其の發達を害する如きものは力めて之を除去せざるべからず。例へば色彩の變化が、眼球の疲勞を恢復するに與つて力あることを知るときは、教室に於ける色彩にもなるべく變化を與ふべく、皮膚の或程度迄順應性を有することを知るときは、溫度の多少の昇降を恐れざるのみならず、却つて之によりて皮膚の鍛鍊をなすが如き是なり。是等感覺機關の養護に關する一般の方法は教育學に於て之を敘述することとなすべし。

第二章 知覺

第一節 知覺の意義

知覺の意義

知覺とは感覺機關の刺激によりて生ずる或外物の意

識なり。之を感覺に比較するとき、知覺は外物の何たるかを知る作用にして、感覺は其の一々の性質を知る作用なりといふを得べし。例へば今茲に一個の林檎ありとせんに、眼にて其の色を見、舌にて其の味を感ずるは感覺なれども、其の林檎なるを知るは即ち知覺なり。之を日常の經驗に徴するに、或事物を知覺せんとするに當り、其の性質を一々感覺に訴ふる如き場合は殆どこれあるなく、單に一二の性質に緣りて、直に其の何たるかを知るを常とす。前例につきていへば、吾人は單に林檎の形と色とのみを見て、之を林檎なりと知覺することを得。是れ現在の形と色とが自然に林檎に關する過去の經驗を喚起し、色及び形以外の要素を過去の經驗中より補へるが爲にして、多くの知覺は實に現在の感覺と過去の經驗との融合より成るものなり。斯く過去の經

類化

験によりて新しき經驗を解釋し、之を收得する作用を類化といふ。外界の事物が類化作用によりて知覺せられ、知識の一分子を構成するに至ること、宛も食物の消化作用によりて身體組織の一部を成すが如し。

直觀

知覺は又之を直觀と稱す。されど兩者を區別して用ふるときには、直觀は實物に接して、其の正しき知覺を得る場合を指す。即ち直觀に於ては事物の各性質を一々覺官に訴へて認知し、事物を構成せる要素を悉く明らかに意識し、以て其の精密なる知覺を得るものとす。故に直觀は或は之を、注意を以て成されたる知覺といふを得べし。直觀による教授は之を直觀教授と稱し、近世の教授法に於て頗る重要視せらるゝ所のものなり。

第二節 空間知覺

空間知覺とは事物の方向・位置・形状・大いさ等に關する知覺をいふ。空間知覺に最も關係ある感覺は視覺及び壓覺・運動感覺等なり。

局所徵驗

局所徵驗（部位覺） 皮膚に點様の刺激を與ふるとき、吾人は直に其の身體の如何なる部分に觸れたるかを知るべし。之を感覺の局所徵驗といふ。局所徵驗は單に皮膚に存するのみならず、網膜亦之を有す。今觸覺計を用ひて、其の兩尖端を二點として感知し得べき皮膚の最小距離を計るときは、此の距離は局所徵驗の始めて變化せることを示すものにして、其の値は皮膚の各部に於て著しき差異を有す。

位置・形状・大いさの知覺

物體の位置・形状・大いさの知覺 物體の位置・形状及び大

遠近及び立體の知覺

いさは盲人にありては、其の物體を経験するときに生ずる局所徵驗、壓覺の連續、運動感覺の分量等によりて、之を知覺すれども、通常人にありては、之に加ふるに物體を明視するときに生ずる動眼筋の運動感覺及び網膜に於ける局所徵驗を以てす。

○遠近及び立體の知覺 盲人は單に運動感覺の助けによりて、遠近即ち距離の大小を知覺することを得れども、通常人にありては、之に加ふるに（一）眼球の調節作用、及び（二）兩眼の視軸（諦視點と中央小窩とを結合する虚線）輻湊の度に從つて生ずる筋覺の量を以てす。其の他映像の大小、物體明瞭の度、陰影・色彩の變化等は何れも距離の知覺を助くるものなり。又立體の知覺は主として、兩眼に於ける物體の映像の差異に基づくものにして、この理は實體鏡によりて容易に

錯覺

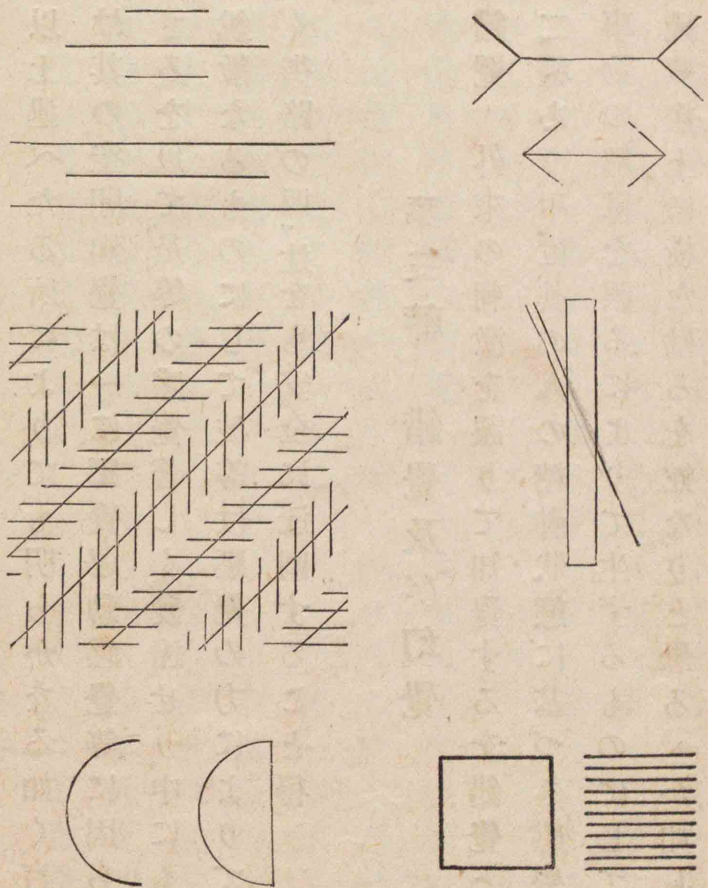
證明することを得べし。

以上述べたる所によりても明らかなる如く、盲人にありては、其の空閒知覺は一に壓覺運動感覺等に因らざるべからざるを以て、是等の感覺著しく發達せり。中にも壓覺は頗る鋭敏なるものにして、彼等は壓覺の力によりて、一本の杖能く街路の四ッ辻をも安全に迂回すること得。

第三節 錯覺及び幻覺

錯覺 外來の刺激を誤りて知覺するを錯覺といふ。錯覺に二種あり、甲は其の人の精神状態に基づき、感覺に現れたる事物の解釋を誤るによりて生ずるものにして、例へば黄昏、繩の途上に横たはるを蛇なりと恐るゝが如し、之を中樞的錯覺といふ。乙は感覺機關の構造に由來するものにして、

種々の錯覺



各人一樣に之を有す、名づけて末梢的錯覺といふ。衣服の縞柄如何によりて、同一人の身長に長短ありと思はるゝ如き是なり。右に圖解せるは、錯覺の中視覺に現るゝものゝ一例なり。錯覺の理は繪畫・彫刻・建築等諸種の美術に於て、頗る廣く應用せらる。

幻覺 外界に刺激なきに拘らず、或刺激に相當する事物を知覺するを幻覺といふ。多く精神病者に起る所の現象なり。音なきに聞き、物なきに見、しかも自ら幻覺なるを知らず。彼の迷信の爲に神佛を認めたりといふ如きも多くは幻覺の致す所なり。

第四節 知覺と教授

以上述べたる所に従ひ左に知覺に關し、教授上特に注意

知覺と教授

幻覺

すべき二三の事項を擧ぐべし。

一、凡て知覺は類化に基づくものなるを以て、教授に當りては先づ、類化の基礎たるべき兒童の舊經驗を理解し置かんことを要す。近時新入兒童の觀念界を調査するもの漸く多きに至れるは是が爲なり。

二、類化の基礎たるべき舊經驗は正確にして有力ならんことを要す。是が爲には代表たるべき事實を精選し、直觀教授によりて兒童の粗雜なる經驗を補正するに如くはなし。初歩の教授の大半は直觀教授にありといふも敢へて過言にあらず。

三、新に教授せんとする事項は兒童既有の知識と何等かの關係を有せざるべからず。全く新しき事物は舊經驗と結合するに由なし。古來教授上の格言として、既知より未知に

進め。『近より遠に及べ。』等の語あり。何れも上の事實を簡單に表明せるものなり。

四、類化を妨ぐる事情を排除せざるべからず。感情の興奮せる場合、心に先入の偏見ある場合等には正しき類化をなし得ざる事多し。

第三章 表象

第一節 表象の意義

表象の意義

○眼前に事物ありて之を意識するは知覺なり。眼前に事物なきも、尙其の事物を思ひ浮がべ、之を意識するは表象なり。即ち表象とは刺激の現存せざるときに生ずる事物の意識にして、之を知覺に比すれば其の明瞭の度に於て、一般に劣るものあると共に、又其の内容に於ても知覺の如く精確な

らず、細かき部分を缺如し、且比較的に不安定なりとす。表象は或は之を觀念と稱す。されど觀念なる語は表象よりも稍廣義に用ひられ、後章論ずる所の概念をも其の中に含ましむることあり。以下普通の用法に従ひ、表象・觀念の二語を混用することゝなすべし。

第二節 表象型式

凡て表象は多くの感覺的要素より成る。然るに是等の感覺的要素中特に主要の位置を占むる感覺は人によりて同じからず。或は視覺的要素の秀づるものあり、或は聽覺的要素の著しきものあり、人々各一定の傾向を有す。此の個人的差異を表象の型式若しくは範類といふ。

表象型式は通常之を視覺型式・聽覺型式・運動型式及び混

表象型式の
意義

型式の種類

合型式の四種に分かつ。視覺型式の人は主として形状・色彩等によりて事物を想起す。機械の發明家・畫家等には此の型式に屬するもの多し。聽覺型式は聽覺による印象の秀づるものにして、運動型式は運動感覺による要素の最も強く働くものなり。音樂家・演説家等には聽覺型式のもの多く、彫刻家・盲人等は概ね運動型式なり。又混合型式は以上の三型式の何れにも屬せざる人にして、何等主要なる感覺的要素を認め難きものなり。

兒童の多くは各特種の型式を有するを以て、教授者はなるべく、兒童の型式の何たるかを確め、之に適應すること力をめざるべからず。されど又一學級の兒童中には種々の型式のもの共存するを以て、教授の方法が單に一方に偏し、或は視覺のみに訴へ、或は聽覺のみに訴ふるが如きことある

教育上の注
意

ときは兒童の多數は自己の型式に適せざる教授を受くることとなるべし。故を以て教授に當りては、なるべく各種の覺官に訴ふるを以て其の眼目となさざるべからず。殊に言語の教授に於て「讀みつゝ書寫することは何れの型式にも適する方法なれば、多く利用せらるべきものなりとす。

第三節 表象の再現—觀念聯合

表象の再現

一度意識を去りたる表象は其の儘消滅するものにあらず、機に觸れて、再び意識に上ることあり。これを表象の再現といふ。然らば如何なる表象が如何なる場合に再現するかといふに、通常、現在意識を占領せる表象と何等かの關係を有するものが順次再現せられ、其の状宛も絲の一端を引けば他端從つて現るゝが如し。換言すれば表象の再現は概し

て觀念聯合の法則に支配せらる。

觀念聯合 机を見れば椅子を想起し、梅といはば鶯を思ふ如く、凡て表象は自ら一定の他の表象を意識内に喚び起さんとする傾向あり。之を觀念聯合若しくは聯想といふ。聯想の成立には左の二法則あり。

聯想の法則

一、接近聯合 同時に若しくは相繼續して意識に起りし表象は互に相聯合し、相互に再現を助く。例へばインク壺を見ればペン自ら想起せられ、電光と雷鳴と相聯合せらるゝが如し。

二、類似聯合 類似の性質を有する表象は互に相聯合す。蛇と鰻、雪と白砂糖、人物畫と其のモデルとの間に起れる聯合の如きは是に屬す。

聯想の條件

以上は觀念聯合の法則なるが、吾人は次に此の聯合を

強固ならしむる條件を定めんとす。蓋し聯合の強固なるに従つて之を想起すること益容易なればなり、即ち左の如し。

一、反復 聯合は反復せらるゝに従つて、強固の度を加ふ。反復には、一時に多く反復するものと、時を隔てゝ屢反復するものとの二法あり。共に教育上頗る有効なる方法にして、絶えず學科の復習をなすの必要此に存す。

二、明瞭 印象の明瞭なるものは不明瞭なるものに比して聯合し易し。而して明瞭なる印象は注意と興味とによりて得らる。嘗て興味ありし事項の容易に想起せらるゝは是が爲なり。

三、始端 第一回到經驗せし事項は同一事實に對する其の後の經驗に比して聯合容易なり。某友人の第一回目の訪問が其の後の訪問よりも能く聯想せらるゝが如し。

四、新近 同一經驗にても新近なるものは時日を経過せるものに比して、一層容易に想起せらる。某友人を想起するとき、直に其の最近の會合及び會合の場所を聯想するが如し。

以上四者の中始端及び新近は何れも其の印象の強きが爲にして、之を明瞭の中に含ましむるも可なるべく、要するに注意及び興味を起して印象を明瞭ならしめ、且之を反復するは聯想を容易ならしむる根本的の二大條件なり。

表象の再現は斯く聯合の強度に依存すと雖も、又同時に再現當時の心狀に左右せらるゝこと多し。即ち再現の當時に於ける**注意の方向**、**感情の状態**等は再現せらるゝ表象を決定するに與りて力あるものなり。若し注意を故郷に向くるときは故郷に關する表象陸續として心意に現れ、又若し

再現當時の
心情

喜び胸に満つるときは自ら愉快なることのみを想起し、其の他に及ぶこと能はざるが如し。教授に當りて力めて兒童の感情を靜平ならしめ、且目的指示又は其の他の方法により、兒童の注意を適當の方向に導くの必要實に茲に存す。

第四節 記憶

記憶の意義

再現せる表象に「嘗て自ら經驗せり」との意識伴なふときは之を記憶といふ。故に記憶の作用を分解するときには（一）經驗を收得する學習（二）以前の經驗を保存する把持（三）其の再現（四）嘗て自ら經驗せりとの意識即ち再認の四段階となる。記憶の種類 善良なる記憶とは學習の容易迅速にして、把持の永續し、且再現の迅速精密なるものをいふ。従つて前節に述べたる所は、やがて又凡て善良なる記憶に必要なる

記憶の種類

條件なりとす。記憶の種類は左の如し。

機械的記憶

一、機械的記憶 文字、文章等を其の儘に記憶し、又は地名、人名、年代等を記憶するが如く、毫も意を内容の論理的關係に止むることなく、唯機械的に之を反復し、印銘するものを機械的記憶といふ。近時の學校教育にありては理會を尊ぶのあまり、動もすれば機械的記憶を排斥せんとするの傾向あれども、こは誤れるの甚だしきものなりといはざるべからず。蓋し記憶も或程度迄機械的練習によりて發達するものなればなり。

論理的記憶

二、論理的記憶 論理的記憶は事物の内容を能く理會し、其の論理的關係に基づきて記憶するものにして、記憶の最良の方法なり。故に記憶はなるべく此の方法によらんことを要す。而して是が爲には教授せる事項を充分に咀嚼せし

人工的記憶

むること最も必要なり。

三、人工的記憶 人工的記憶とは記憶せんとする事項と自己の熟知せる事項とを偶然の關係に基づきて巧みに結合し、以て機械的記憶の困難を減却する方法にして、多く年代・地名・人名等の記憶に利用せらる。此の方法は時としては利用すべきものなりと雖も、偶然の關係を認むるに苦心し心力を徒費するが如きこと往々これあり。さまで推奨すべきものにあらず。

兒童の記憶

兒童の記憶 小學兒童の記憶は成人に比して大に勝れりとは從來一般に考へられたる所なれども、實驗の結果によれば、其の學習能力即ち覚え込む力は成人に比すれば却つて弱く、十三歳乃至十六歳以後始めて急速の進歩をなし、二十二歳乃至二十五歳に於て發達の頂點に達す。されど一

忘却

且學習せるものを把持する力は兒童は大人に勝り、同じく小學兒童にても年少者は年長者に勝れり。即ち記憶の二方面たる學習力と把持力とは反對の向向を取り、學習力大なるときは把持力小に、把持力大なるときは學習力小なりとす。

忘却 記憶の反對を忘却となす。忘却の割合は、材料の如何を問はず、學習せる後の短時間に於て最も多く、時日を経るに従つて次第に之を減少す。忘却の度を減ぜんが爲には第一、學習後時を隔て、屢之を反復し、第二、學習後直に他の作業に従事することなく、數分閒休憩するを可なりとす。蓋し直に他の作業に従事するときは新しき作業によりて得たるものと、先に學習せるものと相互に干涉し、其の固定を妨ぐることをあればなり。

想像の意義

想像とは過去の經驗を材料として、新しき觀念を構成する作用をいふ。例へば未だ嘗て沙漠を見たることなきものが繪畫又は他人の談話により沙漠の狀態を心に描き見るが如し。

想像の種類

想像の種類 想像は之を分かつて受動的想像と能動的想像との二種となす。受動的想像とは觀念の再現に伴なひて自然に起る想像にして、自ら進んで工夫を凝らすことなきも、能動的想像は之に反し、先づ一定の目的を立て、此の目的に指導せられ、新なる觀念を構成するものにして、例へば小説家が自己の構想によりて小説を作り、發明家が新しき機械を創造する場合に於けるが如し。之を大にして學者・技

第五節 想像

想像の利害

術家の事業より、之を小にしては日常些事の計畫に至る迄能動的想像の助によらざるはなし。

想像の利害 感覺・知覺・記憶等は人の知識を増加すれども、是れ唯知識の蓄積に止まり、未だ經驗せざる新らしき事物を作り出すの力を有するものにあらず。其の是あるは實に想像の賜なり。記憶は過去を與へ、想像は未來を作る。未來に對する理想を構成し、之に向つて向上發展せんと希望を起すは一に想像の力によらずんばあらず。豊富なる想像に思考と趣味との結合するあらば、科學・美術及び工藝上に於ける新發明期して待つべし。されど想像にして一旦其の向ふ所を誤り、空想に陥るときは弊や又大なりといはざるべからず。所謂空想とは想像の不合理にして、全く實際より離れたるもの、彼の經驗なき青年が妄りに大志を抱き、小兒

兒童の想像

の好んで虚偽を語るある如きは空想に基づくもの多し。世人往々にして想像を以て全く有害無益のものとなすことあり。こは想像の弊害の方面を過重視せる結果に外ならず。

兒童の想像 兒童の想像は多く受動的にして系統を缺き、且人化的なるを以て其の特徴となす。所謂人化的とは天地萬物を人の如く活動するものと見るの傾向をいふ。小兒が人形に食物を與へ、又は躓きたる石を怨み打つが如きは是が爲にして、彼等が童話・傳説等に對して興味を有するも亦是が爲なり。されば兒童の幼稚なる間は之に童話・傳説等を授けて、其の心性に合せしめ、年齒の長ずるに従ひ、次第に直觀教授・理科教授等を加へ、以て知識の確實なる基礎を與へ、空想より、徐々に、能動的、實際的の想像に導くは教育上重大なる要件なり。能動的想像の養成に與りて特に力あるは

幼時に於ては遊戯、學校に入りて後には手工・圖畫・綴方・算術等の諸教科なりとす。

第四章 思考

思考の意義

數學の問題につきて考へ、物理學の法則につきて考ふといふ場合の如く、凡て考ふる作用を**思考**といひ、思考の所産を**思想**といふ。考ふるとは物と物とを比較し、其の間に存する一致又は差異を認め、事物を一定の關係の下に統一する働きにして、數學にて、甲の角を乙の角に等しとし、(一致)又は等しからず(差異)とするは、甲乙二角の關係を定めたるもの、物理學にて一の法則を立つるは、多くの事物を其の一致點に基づきて統一せんが爲なり。思考の本質は斯く事物の關係を確立するにあるを以て、之を定義して「關係の認識」とい

ふを得べく、我等の知識が相互に相連結し、系統を保持するを得るは一に思考作用の賜なりとす。

第一節 概念

思考作用は通常之を概念、斷定及び推理の三者に區分す。其の中概念とは或種の事物の共通點を總括し、其の凡てを代表する所の普遍的觀念にして、概念を構成する心的作用を**概念作用**といふ。例へば鹿毛馬、栗毛馬、月毛馬、赤毛馬等より馬なる概念を得る如きは一の概念作用にして、其の順序をいへば、先づ諸種の馬を觀察比較し、其の多くの屬性中、凡ての馬に共通なる屬性**本質的屬性**を抽象し、共通ならざる屬性**偶有的屬性**を捨て、然る後之を概括するを要す。凡て概念の構成には、有意的にか、若しくは無意的に、以上に例示せ

概念的意義

概念的順序

概念の種類

る比較、抽象及び概括の諸過程を経ざるべからず。概念を言語・文字に現せるものは文法上に所謂名詞なり。

概念の種類 概念には論理的概念と心理的概念との二種あり。論理的概念は概念構成の諸過程の**有意的に**、完全に行はれたるものにして、概念の内容即ち本質的屬性は明瞭に意識せられ、且他の類似の概念との區別明らかなるを得るものなり。凡て科學の研究は論理的概念の構成を以て其の主要なる任務となす。然るに**心理的概念**は屢、同一事物を経験する間に於て自然に得たるものにして、其の内容明瞭を缺き、時としては水中に住むものを凡て魚類となし、空飛ぶ動物を凡て鳥類となすが如き誤謬に陥ることあり。兒童の有する概念は概ね之に屬す。

概念の外延及び内包

概念の外延及び内包 概念は之を外延及び内包の二方

上位・同位・
下位

面より考察することを得。外延とは概念の指示する事物の範囲にして、内包とは概念の中に含まるゝ本質的屬性の總和なり。而して此の兩者は互に一定の關係を有し、外延愈々大となれば内包は愈々小となり、内包大となれば外延は従つて減少す。試みに「亞細亞人」と「日本人」との兩概念を取りて之を比較するに、後者は前者に比すれば外延遙に減ずれども、其の内包に於ては増加して、亞細亞人の共通屬性に加ふるに日本人特有の屬性を以てし、又「亞細亞人」と「人」とを比較すれば、前者は後者より内包に於て大なれども、外延に於ては著しく小なり。其の他何れの概念に於ても同様の關係を有す。

概念相互の關係 概念を外延上より見るときは、互に上位・同位・下位の關係を有す。今脊椎動物と哺乳動物とを比較するに脊椎動物なる概念中には哺乳動物の概念を含むを

定義

以て、脊椎動物は之を哺乳動物の上位なりと稱し、反對に哺乳動物は之を下位といふ。又哺乳動物・鳥類・魚類等は共に脊椎動物なる同一概念の下に立つを以て之を同位といふ。上位の概念は又之を類といひ、下位の概念は種といひ、以て兩者を區別す。博物學に於て綱・目・科・屬・種と稱するものは此の類と種との關係に特別の名稱を附したるものなり。

概念を明晰ならしむる方法には定義及び分類の二者あり。

定義 概念の内包を規定して、之と他の概念との區別を明らかならしむる方法を定義といふ。定義は通常定義せんとする概念の直上に位する類概念を擧げ、之に種と種とを別つ特異性即ち種差を附加するによりて成る。例へば正方形を定義して

分類

正方形は總べての邊が相等しき(種差矩形)類概念なり。といはんが如し、或種の事物につきて教授したる後、之を纏めんには定義によるを便とすること多し。

分類 概念の外延を分解し、秩序的に枚舉排列するを分類といふ。凡て分類には一定の標準あり、之を分類の基礎と稱す。例へば人を分かちて黄色人種、白色人種、銅色人種等となすは、皮膚の色を以て分類の基礎となせるものなり。されば同一の概念も分類の基礎如何によりて種々異様に分類せらる。分類に當りて守るべき重要な法則は左の如し。

一、類を種に分かつに當り、分類の基礎は唯一個なるべし。人を分かちて黄色人種、白色人種、文明人種等となす如きは是れ文明の度、皮膚の色の二標準を併用せしものにして、此の規則を犯す。

分類に関する法則

二、分類せられたる種概念を合するときには元の類概念と其の外延を等しくせざるべからず。

分類は概念を秩序的に排列し、一目の下に概観せしむるの便あるを以て、諸種の教科、殊に地理、理科等の實質的教科に於て應用せらるゝこと多し。

概念と直観 概念は或種の事物を一の觀念に纏め、之を整理するを以て、心の活動を容易ならしめ、心力の經濟に於て利する所頗る大なり。然るに概念は表象より總括せられ、表象は又直観に基づくものなれば、明確なる概念の基礎は之を遠く直観に求めざるべからず。これ直観教授と概念の養成との互に相離るべからざる所以にして、直観より概念に」とは古來教授學上の一大原則として認めらる。古人が「概念なき直観は盲目なり、直観なき概念は空虚なり。」といへる

概念と直観との關係

は最も適切に二者の關係を表明せるものなり。

第二節 斷定

斷定の意義

「薔薇は美なり」「馬は走る」「人は動物なり」「甲は乙の右にあり」といふ如く、事物に關する一定の立言を斷定といふ。即ち斷定とは事物の性質・狀態又は一事物が他の事物と如何なる關係にあるかを言ひ定むる心作用にして、苟も事物につきて述ぶる所あらんとせば、必ず斷定の形によらざるべからず。凡て斷定には先づ思考の對象たるべき觀念あり、次に此の觀念を規定する他の觀念あり、同時に又是等の觀念を結合する要素あるを見る。第一は之を斷定の**主位**(主辭)、第二を**賓位**(賓辭)、第三を**連辭**といふ。「人は動物なり」の斷定に於て人は主位、動物は賓位、「なり」は連辭なり。斷定を言語に表した

斷定の組織

るものを命題といふ。

斷定の種類

斷定の種類 斷定は之を種々の方面よりして分類することを得。今左に其の中最も廣く行はるゝものを擧ぐべし。

第一、質 主位と賓位との間に一致の成立するか否かによりて分かつものにして次ぎの二種となる。

一、肯定斷定 主位と賓位との間に一致の成立するものにして、「雪は白し」の如し。

二、否定斷定 二者の間に一致の成立せざるものにして、「鯨は魚にあらず」の如し。

第二、量 主位の外延の大いさによりて分かつものにして次ぎの三種となる。

一、全稱斷定 主位の外延の全部につきて立言するものにして、「人は動物なり」の如し。

量

質

様式

二、特稱断定 主位の外延の一部につきて立言するものにして、或人は英雄なり。の如し。

三、單稱断定 「孔子は聖人なり。」の如く、單に一個の人又は物につきて立言するものなり。

第三様式 断定の確實の度によりて分かつものにして、是れ亦左の三種あり。

一、實然断定 主賓兩位の關係の現實に存するものにして、今日は曇天なり。の如し。

二、蓋然断定 断定の未だ多少疑問的性質を帯びたるものにして、可能若しくは未來の事實に關す。例へば、彼は成效するならん。の如し。

三、必然断定 主位と賓位との關係の必然に存在せざるべからざることを表すものにして、人は死せざるべからず。

の如し。

其の他、断定の無制限に立言せられたるか、將何等かの制限の下に成立するかにより、又之を定言断定、假言断定、選言断定の三種に分かつ。其の例左の如し。

- 定言断定 人は動物なり。
- 假言断定 晴雨計上昇すれば天氣良好なり。
- 選言断定 三角形は等邊か不等邊かなり。

第三節 推理

推理の意義

既知の断定より、一の新断定を抜き出す作用を推理といふ。即ち推理とは已に知られたる幾多の断定を基礎とし、之に基づきて事物相互の間に存する新しき關係を定め、已知より未知に推及する精神活動にして、最も複雑なる思考作

推理の種類

用なり。此の際推理の基礎となるべき既知の断定は之を前提といひ、新断定は之を結論と稱す。
推理の種類 推理は之を分かつて直接推理と間接推理との二種となし、間接推理は更に之を演繹推理と歸納推理とに區分す。

直接推理

直接推理 一個の断定を基礎となし、之より新断定を得るものにして、左に其の一二の例を擧ぐべし。

原 断 定

新 断 定

凡ての人は動物なり。 或動物は人なり。

或女子は教育家なり。 或教育家は女子なり。

凡ての人は完全ならず。 凡ての人は不完全なり。

凡ての人は完全ならず。 或不完全なるものは人なり。

間接推理

間接推理 二個以上の既知の断定より一の新断定に到

演繹推理

達するものにして、其の最も普通なる形式は二個の前提、大前提及び小前提と一個の結論とより成るを以て、又之を三段論法といふ。

演繹推理 演繹推理は一般の法則より特殊の場合に進行するものにして、其の例左の如し。

甲 定言断定を以て、其の大前提となすもの、

日本人は亞細亞人なり。 (大前提)

東京人は日本人なり。 (小前提)

故に東京人は亞細亞人なり。 (結論)

乙、假言断定を以て、其の大前提となすもの、

三角形が同じ高さ、と底邊とを有すれば、其の面積相等し。

平行四邊形を對角線によりて二分せる三角形は同し

歸納推理

演繹推理と
歸納推理

高さと底邊とを有す。

故に此の二個の三角形は其の面積相等し。

丙、選言斷定を以て其の大前提となすもの、

動物は地上に住むか、水中に住むか、將兩棲なり。

此の動物は水中に住む。

故に此の動物は地上に住まず、又兩棲にもあらず。

歸納推理 歸納推理は特殊の場合より一般の法則に進

行するものにして、之を例示すれば左の如し。

金銀銅鐵鉛……は熱によりて鎔解す。

金銀銅鐵鉛……は金屬なり。

故に凡ての金屬は熱によりて鎔解す。

演繹推理に於ては結論に表れたる事實は已に前提中に包含せらるゝを以て毫も疑を容るゝの餘地なしと雖も、歸

比論

納推理にありては結論は前提に列舉せられたる事實以外に互るを以て、其の間、多少疑を存するの餘地あるが如し。されど宇宙間の事物は凡て法則の支配を受け、一定の原因には必ず一定の結果伴ふものなるを以て、若し前提に列舉せられたる事實が正確にして動かすべからざるときは、其の結論は一般の法則として、充分信賴するに足るものなり。演繹推理は知識を整理して、之を確實ならしめ、歸納推理は新しき眞理を發見して知識を擴大す。故を以て、教授に於て新知識を與へんとするときは多く後者に據り、應用・練習の場合には主として前者を用ふ。

比論 推理には以上述べたるものの外、尙比論と稱するものあり。比論とは一の場合よりして、他の未知の場合に推及する作用にして、二個の事物が若し幾多の類似點を有す

真理の發見

るときは、之を基礎として、一方に眞なるものは他方にも亦眞なりとなすことを得。嘗て甲某が勉強したるとき成績の良かりしよりして、今回も勉強したるが故に良成績を得るならんとなすが如き是なり。此の推理の確否は一に類似點(勉強)と結論(良成績)との間に内面的關係の存するか否かによりて定まるものなれば、比論をなさんとするに當りては、詳に兩者の關係を考察し、輕々しく外面的事情に左右せられざらん事を要す。

真理の發見 真理の發見には如何なる順序を經、如何なる方法を用ふべきか。之を知るは教授者に取りて、最も必要の事なりとす。蓋し教授に於て新知識を傳達するの作用は之を眞理發見の縮圖と見るを得べければなり。故を以て左に眞理發見に對する一般の順序方法を極めて簡單に敘述

觀察及び實驗

せんとす。

眞理研究の第一歩は觀察及び實驗なり。此の兩者は共に一定の目的の下に事物を注意して經驗する方法にして、觀察は事物を其のあるがまゝに見、實驗は人工によりて、事物を改變し、又は任意に生起せしめて其の結果を検す。凡て實驗及び觀察に於ては、力めて心の靜平を保ち、豫想及び偏見を斥け、なるべく事物の眞相を捉へざるべからず。次ぎに觀察及び實驗によりて得たる事實は互に之を比較し、類似の點に基づきて彙類し、更に進んでは之を説明せんが爲に臆說を立つることを要す。臆說とは觀察・實驗によりて認知せる事實を説明せんが爲に設けたる假定にして、フランクリンが電光と電氣との間に類似點あるを認め、電光は恐らく電氣の作用ならん」と想定したるが如き是なり。

臆說

檢證

臆說一度立たば、其の果して能く事物を説明するに足るの原理なりや否やを確めざるべからず。之を檢證といふ。檢證は或は之を事實に訴へ、或は之を既得の眞理に照らし、或は兩者を併用す。檢證の結果確實と認められたる臆説は之を科學的法則といひ、前に述べたる演繹推理の大前提に相當す。眞理の發見は斯く(一)觀察及び實驗(二)臆説の構成(三)檢證の三段階を経て成るものにして、就中第二の段階は最も學者苦心の存する所なり。

第四節 言語

言語の效用

思考は元來無形のものなるを以て、之が取扱に當りては、何等かの具象的符號と結合し置くを要す。而して是等の符號中最も便利なるは音聲的符號即ち言語なり。言語は單に

思考と言語

思想を自由に發表せしむるの用をなすのみならず、吾人は又是を以て概念の代理となし、容易に自ら思考を進行することを得。試みに「正直は最良の政略なり」との思考に於て、正直、政略等の語なしと假定せよ、思考の困難實に想像するに餘りあり、彼の身振り、手眞似等も亦多少思想を發表するものなきにあらざれども、是等は何れも、其の迅速の度、精密の度、自由の度に於て遠く言語に及ばざるものなれば、唯言語の補助として、之に併せ用ひらるゝに過ぎず。

言語は之を其の發生の順序より考ふれば、固より、思考の後に現れしものならんも、今日にありては、人は凡て言語の世界に生まるゝを以て、先づ言語を學び然る後其の内容に及ぶを常とす。殊に言語の習得は主として模倣によるものなれば、言語は豊富なれども、思考の充實せざることあり。大

に注意せざるべからず。思考は言語を得て始めて明瞭確實なるを得るが如く、言語も亦内容を得て始めて價值あるものなれば、一方に於て思想を言語に發表して、之を確實ならしむると共に、又他方に於て事物の教授を重んじ、充實せる内容を與ふるは實に言語教授上の一大眼目なり。殊に兒童の言語は其の數僅少なれども、之により指示せらるゝ、範圍は大人に比して甚だ廣く、赤きものを凡て花と呼び、黒きものを炭といひ、未來を凡て明日といふ如く、意義概ね曖昧なれば、務めて兒童語の研究を怠らず、適宜に之を矯正するの用意あるべきなり。

第五節 兒童の思考

兒童の思考

概念發生の時期は之を決定すること難しと雖も、極めて

幼少の時代より漠然たる概念を有するは疑ふべからず。殊に言語を使用し得るに至れば急速なる發達をなす。幼兒が動物を見れば凡て之を「犬」と呼ぶ如きは已に心理的概念の發現なり。而して兒童の概念の内容をなすものは主として其の物の作用にして、例へば筆は多くは字を書くもの、馬は多くは人の乗るものとして意識せらる。

兒童の思考は、新しき事物に接する毎に、之を疑ひ、之を理解せんとする希望を起すによりて徐々に發達す。其の大人の思考と異なる所は、大人が言語による抽象的思考をなし得るに反し、兒童は具體的なる事物觀念により思考するにあり。具體性は兒童精神の一大特徴にして、抽象的なる思考は十三四歳以後に於て始めて發達するものの如し。

第六節 思考作用と教授

思考作用は諸種の知力中最も重要な作用なり。記憶の如きも亦重要な心力なりと雖も、若し之に推理力の伴なふものなきときは、管に死知の蓄積たるに止まり、活用自在なるを得ざるべし。思考力の陶冶は教授上主力を注ぐべき中心問題とも稱すべきものなれば、左に之に關し、二三の注意すべき要點を擧ぐべし。

一、慎重に思考する習慣を養成すべし。兒童は經驗に乏しく、思考作用發達せざるを以て、未だ能く事物の本質を見する能はず。皮相の觀察より大膽の結論を下し、偶然の關係をも必然なりとし、毫も其の誤を悟らざることあり。されば教育者は兒童をしてなるべく慎重に思考を進め、徐々に

教授上の注意

推理するの習慣を得しめざるべからず。質問を發しながら、思慮の時間を與へずして其の答を迫り、早きを競はしむる如きは最も戒むべし。

二、教授は具體的なるべし。次に教師は兒童精神の具體性を顧慮し、なるべく教授材料を具體化し、適當なる事例を選ぶに力を用ふべし。是れ兒童をして思考材料に興味を有せしむる第一の方法にして、又其の自己活動を促す最良の手段なりとす。

三、巧みに兒童の疑問を誘發すべし。凡て思考は疑問に始まり、疑問の解決によりて終を告ぐ。古人も「疑は知の始なり」と言へり。然るに兒童は天性、好んで種々の疑問を發するものなれば、教育者は力めて是を利用し、彼等をして能く疑ひ、能く思考し、眞理を愛好するの人たらしめざるべからず。

第三篇 情的現象

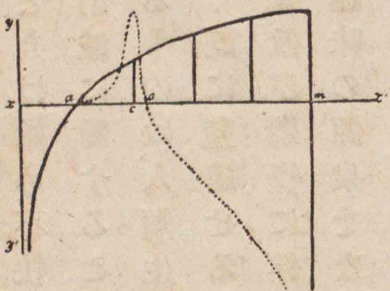
第一章 單一感情と複合感情

單一感情と感覺

單一感情 美しき色を見て快を感じ、苦き味に不快を感じ、
 ずるが如く、感覺に伴なうて生起する最も簡單なる感情を
 單一感情又は感應といふ。今感覺と單一感情とを比較すれ
 ば、第一、感覺は外界刺激の性質を示し、同一の刺激は大凡同
 一の感覺を起せども、單一感情は刺激に對する精神の反應
 を示し、同一の刺激も人により場合により異なる感情を起
 すことあり。換言すれば感情は感覺に比すれば一層主觀的
 なり。次ぎに、感覺は之に注意を加ふるときは次第に明瞭の
 度を増せども、感情は注意して、其の状態を検せんとすれば、

單一感情の分類

刺激と感情との關係
 刺激は、
 快を示す。強きは
 不快を示す。強きは
 不快を示す。強きは
 不快を示す。強きは
 不快を示す。強きは



忽ち不明となり時としては、全く消滅に歸することあり。
 斯くの如く感覺と感情とは全く別種の精神作用にして
 共に意識を構成する最も單一なる要素なり。甲を以て意識
 の客觀的要素とせば乙は其の主觀的要素と見ることが得。
 單一感情は之に應ずる感覺により、大別して

一、有機感覺に伴なひ、生活機能と最も密接の關係を有する一般感情即ち氣分と

二、特殊の感覺即ち視覺・聽覺・味覺・嗅覺・皮膚の感覺等に伴なふもの

との二種となす。而して同一感覺に伴なふ感應にても、又刺激の強度、刺激の時間の長短等によりて、夫れ夫れ趣を異にし、一般に刺激が甚だ強大なるときは何れの感覺も

終に不快を感じずるに至り、又刺激の時間あまり長きに互るときは始め不快を感じしものも、次第に其の度を減じ、終に消滅に歸することあり。諸種の感應中味覺及び嗅覺より來るものは、人類生存上最も必要なるを以て兒童期に於て早く既に發達せるを見る。されど教育上特に注意すべきは視覺及び聽覺に伴ふものにして、此の二者は共に高尚なる趣味の源泉をなすものなれば、幼時より意を用ひて其の完全なる發達を計らざるべからず。

複合感情

複合感情 凡て外物の知覺は前に述べたる如く、多くの感覺的要素の結合より成れども、日常の經驗に於て、個々の感覺を單獨に意識せざるが如く、感情に於ても亦具體的に經驗せらるゝものは單一感情よりも、寧ろ單一感情を要素とする複合感情なること多しとす。例へば食物に對する快

感は味覺、嗅覺及び皮膚感覺に伴ふ諸種の單一感情の融合より成り、輕き衣服より得る快感は溫覺と皮膚感覺との起す單一感情の融合より成るが如し。複合感情中特に注意すべきは視覺又は聽覺の對象によりて生起せらるゝ、適意の情にして、色及び音の調和、形體の對稱、音の律動等の與ふる快感は之に屬す。總稱して初等美的感情といふ。

第二章 情緒

情緒の意義

辱しめられて怒り、賞せられて喜び、友人の死に遭ひて悲しむ如く、自他の利害と相關係して起る強き感情を情緒といふ。即ち情緒とは或對象によりて生起せられたる複雑なる感情にして、身體諸機關に大なる影響を及ぼし、爲に多少精神の平衡を失せしむるを以て其の特徴となす。喜怒哀樂

情緒の意義
情緒の意義
情緒の意義

情緒の表出

の情を始め日常の用語にて感情といはるゝものは概ね之に屬す。

情緒の表出 凡て感情は身體的に表出せらるゝものなれども、中にも情緒の表出を以て最も顯著なりとす。赤面といひ、愁眉といひ、或は戰慄といひ、手の舞ひ足の踏む所を知らずといふ如き、何れか情緒の表出ならざる。故を以て是等の表出を觀察するときは、略ぼ其の人の如何なる感情を有するかを察知することを得べし。情緒の表出を分かつて大要左の三種となす。

一、脈搏呼吸筋力等の變化を起し、甚だしきに至るときは、涙腺・汗腺等の分泌機關及び内臟諸機關の混亂を來す。

二、全身の態度を變じ、手足の運動を起し、時としては感嘆の語を發す。忿怒に際して、思はず拳を握り、攻撃の態度を取



(糖 砂) 味 甘



(酸 椽 枸) 味 酸



(蒼 蘆) 味 苦

(普通心理學修訂版八四—八五)



悦 喜



目 面 眞

るが如し。

三、殊に著しく顔面、就中目及び口に於ける種々の表情を伴ふ。

而して是等の生理上の變化は更に有機感覺となりて、精神に反響し、益、情緒を亢進せしむ。情緒の表出と情緒とは斯く密接の關係を有するを以て、反對に表出によりて幾分か情緒を變化せしむることを得。悲哀の時にも強ひて快活を装うて口笛など試むるときは多少不快の念を減じ得るが如し。

情緒の種類 情緒の種類は甚だ多くして一々列挙するを得ざれば、今左に其の中教育上重大の關係を有するもの二三につきて簡單なる説明を加へんとす。

一、恐怖 恐怖は將に起らんとする危害を豫想するとき

恐怖

忿怒

に起る情緒なり。故を以て、何等の危害を感じざる事物に對しては恐怖を起さざるべきも、時としては始めて見聞せる事物を本能的に恐るゝことあり。小兒の暗黒を恐れ、又は奇異なる動物を恐るゝが如き是なり。恐怖は自衛的の情緒なるを以て、其の正當なるものは固より必要なれども、小兒の本能的恐怖の中には、不合理にして、毫も恐るゝに足らざるものを恐るゝことあり。又兒童の惡癖を抑へんが爲に妄りに其の恐怖心に訴ふる如きも往々見る所なるが、是等は何れも教育上大に注意すべき所なりとす。

二、忿怒 忿怒は不快感を與ふる事物を除去せんとする時に起る自衛の情緒なり。忿怒の正當なるものは往々勇氣・正義の念等の基となることあれども、其の性質反社會的のものなれば、力めて此の情に驅らるゝことなからんを要す。

自尊と卑下

同情

三、自尊と卑下 自己の價值を確認したるときは自尊の情を生じ、價值少くして、他人に劣れるを覺るときは卑下の感を抱く。自己の價值を過大視する傲慢・自負の如きは固より不可なりと雖も、正當なる自尊心は勇氣・果斷・努力等の源泉となり。獨立心の基となるものなれば、自己の價值を正當に認めしむることは教育上最も必要の事なりとす。卑下甚だしきに至るときは卑屈となり、自暴自棄となり、終には決行の力に乏しく、向上の念なき人となるに至るべし。

四、同情 同情は他人の快苦を自己の快苦の如く感ずるの情即ち思ひ遣りのこゝろなり。幼兒が母の笑ふを見て笑ひ、他兒の泣くに促されて泣くは、他人の表情に共鳴するより來る有機的同情なり。同情に反するものを反情といふ。反情は他人の苦を見て快を感じ、他人の快を聞きて却つて苦

を感ずる反社會的の情緒なり。

第三章 情操

情操の意義

情緒は或事物に對して起る一時的の強き感情なり。されど若し同一事物に關する情緒が屢、反復せらるゝときは、終に之に對して固定せる感情の一傾向を生起するに至るべし。一友に會して喜び、其の去るを聞きて憂へ、別れに臨みて悲しみ、再會して喜ぶ等種々の情緒を経験するときは終に其の友に對する愛情を生じ、反對に再三己を苦めたる悪友に對しては自ら憎惡の念を萌すに至るが如し。之を情操といふ。約言すれば情操とは或對象につきて抱懷する感情の永續的傾向にして、上に例示せる愛情と憎惡とは其の最も重要なる形式なりとす。

知的情操

情操は之を具體的情操と抽象的情操とに二大別す。前者は父母・教師に對する愛、家族に對する愛の加く、具體的事物に向へる情操にして、後者は抽象的觀念に對する情操なり。抽象的情操は更に之を左の四者に區分す。

一 知的情操 眞理を愛し、虚偽を惡むの情を知的情操といふ。自己の理會し能はざる事物に接するとき一種の不快を感じ、努力して之を解決したるとき名狀すべからざる一種の快感を覺ゆるは是れ人情の自然にして、眞理を愛し、無知を惡むは人類固有の性能なり。されば知的情操は何人も之を有すれども、其の程度に至りては人々各差異あり。甚だしきは、之が爲に全く寢食をも忘れ、眞理の前には自己の生命を捧げて毫も悔いざるに至る。

知的情操の涵養につき、特に必要なる條件は、教師自ら知

的情操に富み、能く知識を愛し、眞理を好むの人たるにあり。知識に對する愛は自ら熱心なる教授となり、熱心なる教授は自ら兒童をして知識好愛の念を起さしむ。兒童教科の好惡を調査せるものを見るに、此の好惡は著しく教師の嗜好に左右せられ、教師の最も得意なる學科を以て、最も好める學科となすもの甚だ多し。教師の興味はやがて兒童の興味なり。熱誠以て之を導くものにして、始めて能く兒童の知的情操を振起することを得べし。

美的情操

二、美的情操 美的情操は自然美及び人工美を觀賞するに際し起る情にして、全く利害の念を離れ實用を顧みざるを以て其の特徴となす。高尚なる美的作品に接し、醇乎たる忘我の状態に入るは是れ美的情操の極致にして、又人生至上至樂の境涯なり。美的情操は初等美的感情に對して又之

を高等美的感情と稱することあり。

美には純粹の美即ち優美の外に、又瀑布の奔下するを眺むるときに生ずる如き壯美、狂言を見るときに生ずる如き滑稽美、悲劇を見るときに生ずる如き悲哀美等あり。狹義に美といへば單に優美を指し、廣義の場合には四者を併稱す。美的情操は單に高尚なる娛樂を供し、精神に慰安を與ふるのみならず、又人の氣品を高め、下等なる欲望に囚はるゝを防ぐ等道德と頗る密接の關係を有す。されど優美、悲哀美等は時としては、人をして文弱に流れしむるの弊なきにあらず。學校教育就中男子の教育にありて最も力を注ぐべきは壯美の情の養成にありとす。美的情操の養成には或は校舍、教室、庭園等を適當に裝飾し、或は遠足、旅行を利用して、壯麗なる自然美に接せしむる等其の方法一にして足らず。殊

道德的情操

に唱歌・圖畫・手工作法等は是に對し、甚だ重要な教科なりとす。

三、道德的情操 善を愛し不善を惡むの情を道德的情操といふ。此の情操は道德的行爲の原動力たるを以て、多くの情操中最も重要な地位を占め、社會生活上一日も缺くべからざる所のものなり。

良心

道德的情操は良心の重要な一要素をなす。所謂良心とは吾人の全精神が道德的活動を營む時の意識状態に名づけたるものにして、其の中に知情意の三作用を含む。即ち善惡の何たるかを識別するは其の知的作用にして、善を愛し惡を憎み、善は之を嘉し、惡は之を悔ゆるは其の情的作用、善は之を爲し、惡は爲すべからずと刺激するの力は其の意的作用なり。良心は斯く複雑なる作用なるを以て其の萌芽は

宗教的情操

人々の稟賦に潜在すれども、是が完全なる發達は固より教育と經驗との力に待たざるべからず。

兒童の道德的理想は年齢と共に發達す。幼兒にありては理想の人を父母・教師等之を家庭及び周圍に求むれども、長ずるに従ひ歴史的人物又は現代の卓越せる人士を以て其の理想となす。又幼兒にありては主として財産・地位等を標準となせども、知識の進むと共に、次第に倫理的價値を尊重するに至る。

四、宗教的情操

超人者を崇拜し之に歸依するの情にして、兒童の宗教的感情は成人の宗教的生活を見、其の中に生活するによりて發達す。我國の教育は古來宗教と獨立し、學校に於て特定の宗教を教授することを許さず、修身科を以て德育の中心教科と定めたり。されど宗教的情操は人をし

て不動の信念を有するに至らしめ、品性の確立に資すること頗る大なるものあるを以て、學校教育に於ても妄りに此の情操を害ふことなく、進んでは兒童の程度に應じて宇宙の整然たる秩序を知らしめ、次第に敬虔の念を養はんことを要す。

第四章 感情の教育

個々の感情の教育につきては、各章之を附説したるを以て、左に感情教育に關する一般の事項につき概括的に略敘する所あらんとす。

一、感情の修練 助長すべき善良の感情は之に對する適當なる刺激を與へ、又抑制すべき惡感情は之が刺激を遠ざけ、次第に修練を加へ情緒をして善良なる情操に發達せし

感情教育の方法

むべし。

二、感情の相殺及び轉向 感情は、時としては妄りに之を抑制せんとすれば却つて益、激烈に至ることあり。斯かる場合にありては、之に反對せる他の感情を誘起して、相互に相殺せしむるか、又は適當なる刺激によりて、兒童の注意を轉向せしむるに如くはなし。特に感情の變化し易き兒童に取りては此の方法は甚だ有効なりとす。

三、模倣 感情は頗る暗示的の性質を有す。故に父母、教師の表情は自ら兒童の模倣する所となり、此の表情は引いて情緒に影響し之を支配するに至る。快活なる教師の下にある兒童は陰鬱ならんと欲するも能はざるべし。

四、環境の整理 兒童の周圍を適當に整理し、常に自然美及び人工美による良好なる刺激を兒童に與へ、一方に於て

劣等なる感情を起すの機会なからしむると共に、他方に於て高尚なる感情を誘起するに力むべし。

五、知識の開発 感情と密接に相關係せる知識を開發し、感情の發現に當りて、充分其の正否を反省するの習慣を養ふべし。

第四篇 意的現象

第一章 反射運動と本能

意志の廣狹
二義

意志には廣狹二義あり。廣義には精神の發動的方面を總稱し、反射運動・本能等より執意に至るまで、凡て外界に向つて發動せんとするの傾向を指し、狹義には執意と同意義に用ひらる。本書に於ては之を廣義に解し、順次に其の簡單なるものより複雑なるものに及ぼんとす。

凡て動物は遺傳により、生後の習得を待たずして、生を保つに必要なる種々の運動をなすことを得。此の種の運動は一方に於て動物を外界に順應せしむると共に、他方に於て又高等複雑なる意志の基礎をなすものにして、分かつて反

反射運動

射運動及び本能的動作の二種となす。

反射運動 外來の刺激に對し意識の媒介を経ずして、機械的に反應する單一なる運動を反射運動といふ。例へば蠅蚊等の顔面に止まるときは無意識の中にも之を拂ひ、強き光線に遇ふときは自ら瞳孔を縮小するが如き是なり。反射運動には「瞬き」の如く、運動の結果を意識するものと、「瞳孔の縮小」の如く、全く無意識に了るものと二種あり。

本能の意義及び種類

本能 鳥の學ばずして巢を作り、嬰兒の生まれながらにして乳を吸ふ如く、目的を豫知することなく、又之に對する教育をも受くることなくして、しかも能く目的に合する動作を營む能力を**本能**といふ。本能を分かつて、(一)自己保存の本能、(二)種族保存の本能、(三)社會的の本能、及び(四)順應的の本能發達の本能の四種となす。營養本能、爭鬪本能の如きは第一に

順應的の本能

屬し、兩性相愛の性的本能及び兒子の養育に關する保育本能は第二に、群集本能、共働本能の如きは第三に、模倣の本能、遊戲の本能の如きは第四に屬す。而して是等の本能は必ずしも凡て誕生と共に現るゝものにあらずして、其の發現に一定の時期あり。人類に於ては、自己保存の本能最も早く、順應的の本能及び社會的の本能之に次ぎ、種族保存の本能は最も遅く、青春期に於て始めて發現す。

幼兒をして外界に順應することを學ばしむる順應的の本能は、早くより遊戲の形にて現れ、二三歳以後模倣の本能著しく發動す。他人の運動するを見るときは、其の目的及び意義につきて何の考ふる所なく、單に運動の暗示によりて直に之を模倣し、一度模倣し得たるものを、自發的に絶えず反復するは兒童のならひなり。模倣の中、模倣せんと意識な

本能の變化

くして、自然に起るものを暗示的模倣又は反射的模倣と言ひ、模倣せんとして模倣するものを意識的模倣といふ。兒童は模倣によりて言語・道德・宗教・風習等を學び、大人は模倣によりて新なる流行及び風習を成す。

本能の變化 本能は遺傳的傾向なれども、必ずしも固定せるものにあらず、境遇に應じて幾分か變化を來し、又は本能的動作の結果にして有害なるときは、爾後其の動作の制止せらるゝことすらあり。多くの鳥類は境遇に應じて多少巢を作るの方法を變じ、啄むことは鳥の本性なれども、經驗の結果惡臭を有する食物を啄むことを禁止するに至る如きは是なり。殊に人類の本能にありては、遺傳として享受するものは多くは其の大體の輪郭に止まり、一々の内容は生後の經驗によりて決定せらるゝを以て之を彼の比較的固

定せる動物の本能に比すれば其の變化甚だ容易なり。而して是れ教育の可能なる有力なる理由なりとす。

第二章 衝動と欲望

衝動

衝動 渴する人、水を見れば思はず手を出して之を飲まんとし、小兒に示すに玩具を以てすれば、前後の思慮なく之を掴まんとす。此の如く、刺激の現るゝと共に直に外部に向つて運動を起さんとする意識の傾向を衝動といふ。即ち衝動による動作は思慮の結果として起る動作に相對するものにして、内部よりの壓迫により、殆んど盲目的に發動するを以て其の特色となす。それは反射運動の如く全く生理的のものにあらず。又動作の目的及び手段につきて考量せる結果にあらず。小兒及び下等動物の動作は概ね之に

欲望

屬す。

欲望 多くの場合に於て衝動は直に動作となりて外部に表れんとするものなれども、若し他の事情のあるありて、多少にても、其の實現を妨げらるゝときは茲に**欲望**を生ず。即ち欲望は自己に快感を與ふる事物を得んとして、未だ之を得ざる状態にして、現在の不満足なる我と、其の事物を得たる時の満足なる我との對照よりして起る所のものなり。欲望の習慣となりて固定せるものを**偏向**といひ、偏向の更に進みて、殆ど第二の天性となりしものを**性癖**といふ。飲酒の欲、喫煙の欲の如きは屢、性癖となり、教育の力も復た如何ともする能はざるに至ることあり。

第三章 執意

執意は又狹義に意志と稱せらるゝものにして、倫理學等に於て意志といふ場合には**執意**を指すを常とす。

執意には通常二個以上の欲望ありて相争ひ、思慮・選擇及び決定の諸作用を経て、然る後始めて動作に移行す。例へば遊戯と讀書との二個の欲望ありて吾人を誘ふとき、書齋にありて書を讀まんか、室外に出で、遊戯をなさんか、二者の中何れが能く己が目的とする所に合するかと思ひ惑ふは思慮なり。思慮は通常不安の念を伴ふ。思慮の結果其の一方を斥けて、他方を取り、讀書・遊戯の二者中其の一を**選擇**にして、選擇したるものを實行せんとするは**決定**なり。決定は安固の情を伴ふ。決定の後には動作あり、動作の後には**満足**の感を覺ゆ。

執意の二種

執意の二種

されど執意は常に身體の運動となりて、外

欲望の統制

部に表るゝものに非ず、時としては内部の激情を抑へ、其の動作に移るを禁ずることあり、其の外部的動作となりしものを外部意志といひ、内部的に終るものを内部意志といふ。

道徳的努力 執意に現るゝ二個以上の欲望は常に同一の價値を有するものにあらず。之を己が理想に照らし、己が境遇に應じて判斷するとき、其の一方は比較的劣等にして、他は比較的高等なることを發見すべし。即ち身體的欲望は之を知識の欲望に比して、一般に卑しく、名譽の欲、權力の欲は道徳に對する欲望に比して、下等なりとせらるゝが如し。されど色・食の如き下等なる身體的欲望は之を眞・善・美に對する高等なる欲望に比すれば、其の勢力往々にして甚だ強く、之を抑壓するに大なる努力を要することあり。努力充分にして高等なる欲望勝利を占むるときは、其の行爲は道

意志の自由

徳的なれども、之に反して努力足らず、下等なる欲望に就き其の奴隸となるときは、終に不道徳に陥ること多し。是れ古人が禁欲説を唱へて、下等なる欲望を絶滅せんとせし所以なり。されど極端なる禁欲説は是れ亦一方に偏したるものにして、如何なる欲望もそれ自身全く不必要なるものあることなし。要は下等の欲望を高等なる欲望に従屬せしめ、凡ての欲望に相當の地位を與ふるにあり。之を**欲望の統制**といふ。

意志の自由 欲望の選擇に當りて下等なる欲望と高等なる欲望と其の何れを選ぶも、全く自由なりと感じ、決して他より強迫せらるゝことなし。是を**意志の自由**といふ。斯く選擇も決定も自ら之を爲すを以て、吾人は自己の行爲に對して責任を有し、善も惡も共に自ら其の責に任ぜざるべか

らず。人として意志の自由を感じざるものも、將責任の感を有せざるものもあることなし。若し意志の自由なく、責任の感なくば道徳的事實も亦存することなきに至らん。

第四章 習慣と品性

習慣の價値

習慣 同一の行動にして屢、反復せらるゝときは、其の發動次第に容易となり、遂には習慣となり、機械的に之を遂行し得るに至るべし。習慣は單に（一）行動をして正確・迅速・一樣ならしめ、（二）行動に伴なふ疲勞を減ずるのみならず、（三）其の始め、意識的に努力を要せしものをも機械的に變じ、意識をして、更に進んで新しき活動を開始するの餘地を生ぜしめ、人をして絶えず向上發展せしむ。若し世に習慣なからんか、吾人の精神は日常の些事にのみ拘はるの外なく、復た何等

品性の意義

の進歩を見ること能はざるべし。

品性 意志の習慣性を品性といふ。即ち品性とは意志活動を反復せる結果、強固なる意志の習慣を形成せるの狀態にして、之を過去の行爲の總果と見るを得べし。されど一度品性 成立するや其の人の將來の行爲は、一に此の品性によりて規定せらるゝものにして、品性は之を他の方面より見るときは、實に行爲の原因を爲し、行爲を一定の主義の下に統一する所以のものなり。晨起の習慣を有する人が、晏起を以て却つて苦痛と感じ、慈善家が貪慾の行爲を敢へてすること能はざる如きは此の理に基づく。要するに行爲の結果は品性となり、品性は更に行爲の原因をなし、二者は相互に原因結果の關係を有す。

品性の改造

品性は一度成立すれば變化せざるものなりやといふに

然らず。吾人は知識の進歩、境遇の變化等に伴ひて、絶えず新しき理想を構成し、此の理想に導かれて、新しき意志活動をなすものなれば、此の新活動が翻つて品性に影響し、或は之を強め、或は之を弱め、或は徐々に其の方向を變化し得ること固より論を待たず。品性は決して固定して動かざる習慣の結束にあらず。而して是れ實に個人の進歩發展ある所以にして、又教育及び修養の必要なる所以なり。

第五章 作業と疲勞

作業と練習

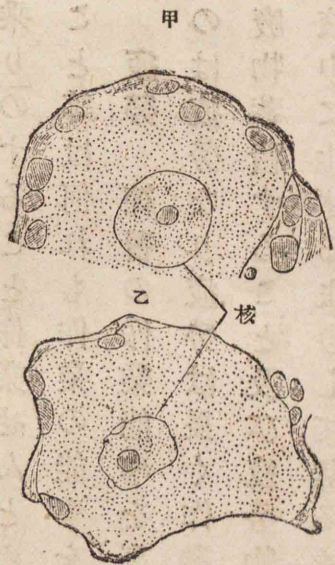
作業 一定の目的を有し、心身を活動せしむるを作業といひ、之を身體的作業と精神的作業とに分かつ。

作業の能率を高むる第一の條件は練習なり。凡て練習は其の初期にありては効果著しく現れ、作業の進歩甚だ大なるも、一定の時期に及べば一時全く發達の停滯し、時としては却つて退歩を見ることあり。されど此の時期に於て失望することなく、練習を持續するときは、再び顯著なる發達をなし、習熟の頂點に達すべし。其の他、作業に親しみを覺え、「氣乗りのすること、作業せんとの意志強く、緊張して事に従ふこと等は、何れも作業の能率を高むるに與りて力あり。

疲勞

疲勞 練習の作業能率を高むるに反し、之を減殺するものは疲勞なり。疲勞は長く作業を繼續せる結果組織内に老廢物蓄積すること、及び疲勞物質と稱する一種の毒素の血液中に生ずるよりして起るものにして、神經細胞に變化を起し、有機體の危害に向ひつゝあることを報告す。故に疲勞を忍んで、尙作業を持續する時は、終に心身を害ひ、其の極病的現象に陥ることあり。

疲勞による神經細胞の變化
甲、休息せるもの
乙、疲勞せるもの



なり。

休息 休息は疲勞を恢復する第一の手段なり。されど課業の中間に於ける休息は其の時間長きに互るときは、課業に對する注意の順應を失ひ、得る所却つて失ふ所に及ばざ

疲勞は兒童幼少なるに従つて早く發現す。六歳の兒童は一時閒若しくは半時間間の課業にて、已に疲勞の徵候を示せども、十三四歳の兒童は大凡三時間間の課業後始めて明らかに之を認め得べし。されど青春期に於ては、再び疲勞を來し易く、又學級兒童の數少き時は、各兒童の注意は、兒童數多きものに比し、一層緊張せるを以て疲勞の度従つて大

意育の必要

第六章 意志の教育

ることなしとせず。又精神的作業を相互に轉換し、若しくは精神的活動と身體的活動との交代により疲勞を恢復し得べしとは、從來多く信ぜられたる所なれども、凡て疲勞の結果は心身全部に波及し、決して其の一部分に止まるものにあらず。あざれば、作業の轉換は單に兒童の興味を新にし、一時倦怠の情を防ぐのみ。疲勞の恢復に對し、さまで効果あるもの

教育の目的は圓滿なる人、換言すれば身體及び精神の諸作用の最も完全に發達せる人を作るにあり。されど是等の諸作用中人の人たる所以のもの、即ち人格の核子をなすものは實に意志行動にして、人の價値は全く其の人の意志行

動如何によりて定まるといふも不可なし。加ふるに現今社會の趨勢は從來に比して、益、意志の強固なる人を要求するものがあるが如し。之を意志の人格に於ける位置より見るも將社會の要求より考ふるも意志の教育は實に教育の中心問題をなすものなり。左に意志教育上特に注意すべき條項を略述せんとす。

知見の養成

一、行爲の善惡を判別するの知見を養ひ、行爲に先だちて審に思慮するの習慣を附與し、同時に善は之を好み、惡は之を惡むに至らしめざるべからず。之が爲には修身教授を始め命令・訓諭等は何れも有力なる手段なれども、其の最も有效にして且確實なるは、生きたる模範なりとす。示範は兒童をして善行の何たるかを直觀せしむると共に、之に對する感情を起さしめ、無意識の間に善惡如何を體得せしむるの

身體の鍛鍊

力を有す。

二、障碍に遇ふも容易に屈することなく、耐久持續、外に向つて能く奮闘し、内に向つて能く節制し、努力的活動を以て却つて愉快なりと感ずるに至らしめざるべからず。是が爲には平素より身體を鍛鍊し、其の活力を充分にし、元氣を旺盛ならしむること最も必要なり。是れ體育と意育との密接なる關係を有する所以にして、彼の英國の教育が古來體育を以て品性陶冶の主要なる方便となし、其の國技たるフットボールによりて、堅實剛健なる國士を養成し來れるの事實に此に存す。

自信の念

三、成功に對する信念を與へ、強き自信を以て、事に當らしめざるべからず。兒童の程度に合する適當の作業を與へ、自己の力によりて之を成さしめ、其の成功に對する愉快を味

自信の念

は、しむるときは、兒童は次第に自己の力を認め、自信の念を起すに至る。己が力に應ぜざる作業は屢、失敗を招き、意志頓挫の基となることあり。特に兒童は暗示感性に富み、長者の一言一行は直に其の意志に作用し、之を左右するの力を有するものなれば、兒童の成功を適當に承認し、之を獎勵する事を怠るべからず。

欲望の統制

四、不良なる欲望の起るときは妄りに之を抑壓することなく、他の高尚なる欲望を以て之に代らしむることを要す。是れ猶感情教育に於て其の轉向及び相殺を必要となせるが如し。

習慣の養成

五、品性は意志の習慣性なり。故に道德的品性を作らんとせば先づ善良なる習慣を養成すること必要なり。習慣の養成に關して注意すべき要件は大凡次ぎの如し。

イ、新しき習慣を作り、又は古き習慣を破らんとするには極めて鞏固なる決心を以て之に着手せざるべからず。されど年少の兒童は未だ自ら決心をなすの力に乏しければ、之を補ふに教師若しくは交友の指導監督を以てし、他より拘束することを要す。示範は此の點に於ても亦最も有效なる手段なり。

ロ、新しき習慣の固定するに至るまで、之に反對せる事情の起らざることを要す。之が爲には各教師が各一定の主義によりて統一ある教育を施すべきは勿論、又全校の方針相一致して、善良なる校風の下に統一せられざるべからず。

ハ、一時に多くの習慣を作らんとすべからず。一時に一事。とは習慣養成上守るべき原則なりとす。

二、苟も習慣たらしめんとする行爲を實行するの機會
あらば、直に之を捉へ、決して逸失せしむべからず。一機會
を失ふは屢、之を失ふの端緒なり。

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字が並んでいる）

餘論

第一章 兒童心身の發達

第一節 發達期の區分

發達期の區分

兒童の心身は絶えず發達するものなれば、明らかに其の
時期を區分すること能はざれども、又年齢に應じて、夫れ夫
れ特色の認むべきものをなきにあらず。通常初生時より丁年
期に至る間を、其の特色に基づきて、左の四期に分かつ。幼
幼 幼兒期 生後大凡二個年。
童 兒童期 幼兒期の終より大凡七歳に至る。
少 少年期 大凡七歳より青春期に至る。
青 青年期 少年期の終より丁年に至る。

發達の形式

兒童の發達は、常に連續すと雖も、其の速度に至つては必ずしも一樣ならず、概して之を言へば、(一)兒童の幼少なる間は變化急速なれども成長するに従ひ變化の度次第に減じ、成人に至るに及びて略ぼ固定し、(二)發達の進路は直線的ならず、其の急激に進む時期と遲緩なる時期と相交はり、曲線的に動搖す。此の二者は兒童發達の二大形式とも稱すべきものにして、兒童觀察に際し、教育者の特に注意すべき點なりとす。

第二節 身體の發達

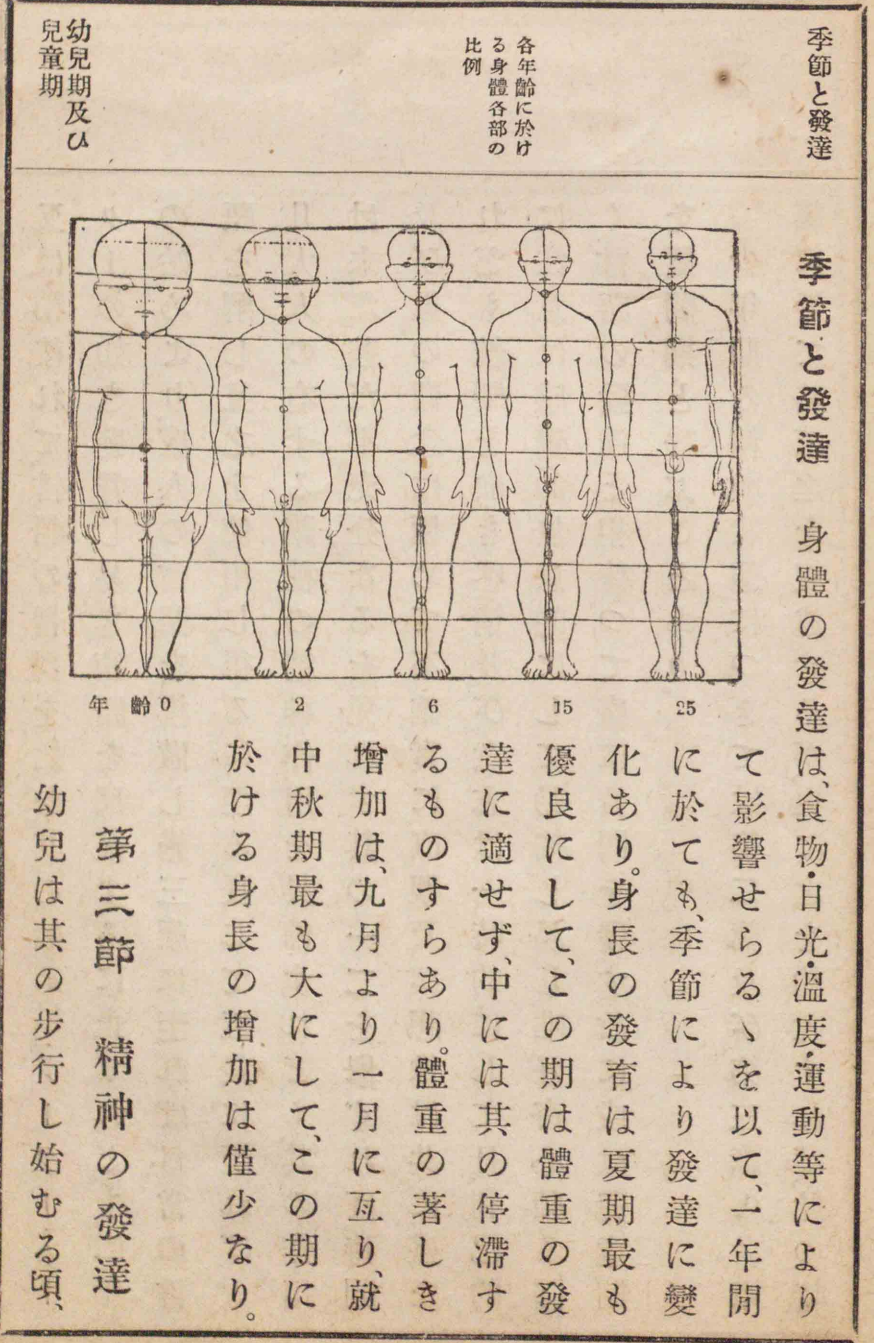
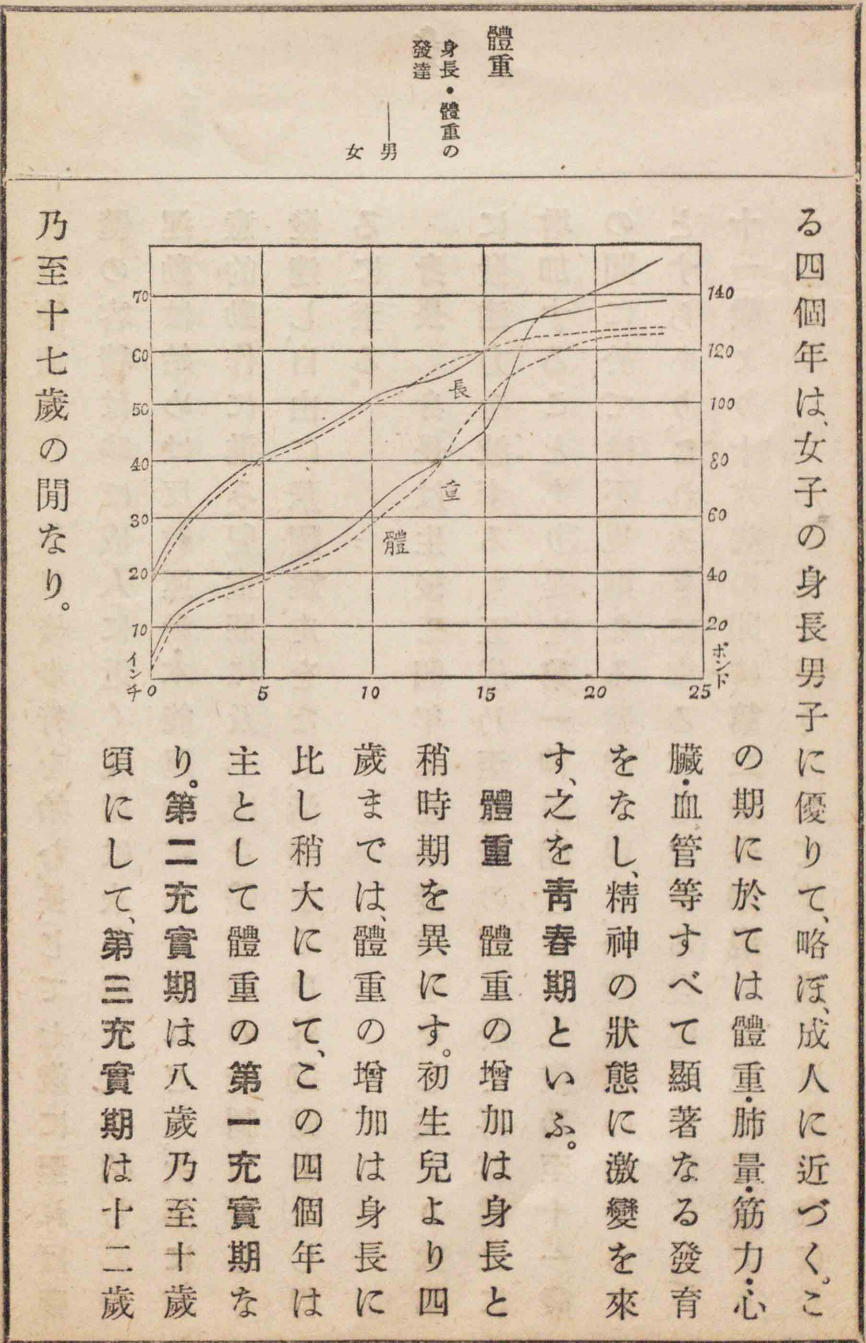
一般の發達

一般の發達 初生兒は一般に頭大に、胸小に、足短く、身體權衡を失し、筋肉亦微弱なれども、十二週乃至十四週に至れば能く事物を把握し、六七個月以後初めて乳齒を生じ、九個

身長

月以後匍匐し、一年以後歩行を始む。長じて七歳に至れば腦髓の容積は略ぼ成人に近く、乳齒は永久齒に代り始む。其の運動は始めは反射運動本能運動に過ぎざれども、次第に有意的動作に進み、兒童期に及べば身體運動の統制力著しく發達し、自由に飛躍跳走をなし、活潑なる戶外運動をなし得るに至る。

身長 身長は生後二個年急速の發達をなし、夫より次第に發達力を減ずるも、五歳乃至七歳の間に於て再び稍急に増加することあり、是を第一伸長期となす。九歳乃至十一歳の間に於ては不規則なる發達を現し、一時發達の止まることすらあり、これ次ぎに来るべき大なる發達の前徴にして、十一歳より十六歳の間に、第二伸長期現る。女兒は男兒よりその時期一年乃至二年早きを以て、十一歳より十四歳に至



又は稍後れて、言語の習得を始む。其の始めは、「ラーラー」
「ター」の如き發音し易き喃語を反復するに止まれども、二年
の始めより、成人の言語を模倣し、滿三歳に至れば日常の言
語を解し、且之を使用し得るに至る。長じて五歳に至れば大
凡大人の有する諸種の精神作用を具備すれども、其の作用
は未だ甚だ不充分なるを免れず。其の一二を擧ぐれば、時間
及び數の觀念は極めて不確實に、直觀及び想像は共に盛な
れども統制を缺き、感情及び意志は一時的にして且利己的
に、注意は感覺的無意的にして動搖し易し。唯好奇心頗る強
く、言語の發達と相待つて盛に質問を發す。故に或は兒童期
を質問期と呼ぶことあり。

少年期

少年期の精神状態につきては第二篇及び第三篇の各章
節に於て略ぼ之を叙述せるが、更に之を約説すれば、此の時

青年期

期は知識及び技能の著しく進歩する時にして、讀書力次第
に増加し、同時に筋肉運動微細に赴き、技能的練習をなすに
適す。殊に其の後半期に於ては思考力稍發達し、推理は徐々
に抽象的となり、想像も亦合理的となるを得るに至る。感情
にありては同情・愛情等の社會的感情稍發達し、意志の方面
に於ても自制力進み、十歳前後よりして眞面目に學習し、多
少有意的に注意を持續することを得。

進んで青年期に入るや、身體の發達、活力の充實と共に、精
神作用亦大に複雑の度を加ふ。殊に知力作用の中核とも稱
すべき思考力は殆ど完全の域に達し、諸種の情操は發達し、
意氣大に昂り、行動亦甚だ活潑なり。されど他方に於ては激
烈なる感情を有し、空想は其の腦中を支配し、動もすれば主
我の念に富み、舉動の粗暴に流るゝの弊あり。其の他兩性の

關係・飲酒・喫煙の惡習慣、諸種の犯罪の傾向等も丁年前後に起ること多ければ此の期は教育上特に注意を要すべき一大危期とも稱すべし。

個性

第二章 個性及び人格

個性 心身發達の梗概は上に述べたる所の如くなるが、是等の發達を支配する勢力に二あり。一は人の生まれながらにして有する稟賦即ち遺傳の傾向にして、他は生後の經驗によりて得たる境遇の影響なりとす。先づ先天的の傾向あり、是に境遇の影響を加へて始めて心身の發達を見ることを得。然るに此の二勢力は人によりて各相違あり、兩者の全く相等しきもの未だ會て之あることなし。故を以て人々其の性を異にし、人心の異なる宛も其の面の如し。斯く一の

材能

個人を他の個人より分かつ所以の精神的特質を個性といふ。

個性の相違 精神作用を知・情・意の三者に區分する如く、個性の差又之に應じて、大凡材能・氣質及び品性の三方面より觀察することを得。

一、材能 知性に關する個性の相違は甚だ多く、感覺の鋭鈍及び一部の感覺の缺損(聾啞)に基づくもの、表象型式の如何によるもの、記憶に於て學習の早くにして忘却の遅きもの、二者共に早きもの、二者共に遅きもの、學習の遅くして忘却の早きもの等種々あり。想像には受動的直觀的なるものと能動的構成的なるものとの別あり、思考には或は演繹推理に長ずるあり、或は歸納推理に長ずるあり。是等諸種の特質相合して個人の材能を成す。

氣質

二、氣質 生まれながら有する生理状態に基づき、主として感情生活に現れたる特殊の傾向を氣質と言ひ、之を刺激に應ずる反應如何により、左の四種に分かつ。

多血質 多血質の人は刺激に對する反應急にして弱し、快の感情に秀で、快活なれども忍耐力に乏しく、舉動輕躁なるを免れず。

胆汁質 胆汁質の人は刺激に對する反應急にして強し、不快の感情に傾き、短氣にして怒り易けれども、勇往果斷忍耐力に富み、舉動亦活潑なり。

神經質 神經質の人は刺激に對する反應遅くして強く、憂鬱にして悲觀し易し。従つて事に當りて容易に決する能はざれども、一旦決したる以上は強く之に固着す。古來天才と稱せらるるものには此の氣質に屬する人多し。

品性

正常と異常

粘液質 粘液質の人は反應遅くして且弱し。快の感情に傾けども、活氣熱心に乏しく、多く事物に關心せず。動作は不活潑にして、緩慢なり。されど心情の冷靜なるが爲に事に當りて動ぜざるは其の特長なり。

氣質は單に個人によりて異なるのみならず、同一の人にも年齢によりて多少の變化あり。概して、幼時は多血質、少年期は神經質にして、壯年時代は胆汁質に移り、老年に至りて粘液質に傾くが如し。

三、品性 品性は之を其の強弱と性質との二方面より觀察するを得べく、強弱の上より鞏固なる品性、薄弱にして動搖する品性に分かち、性質の上より善良なる品性、不良なる品性、劣惡なる品性等に區分す。

正常と異常 更に正常と異常との方面より之を見れば、

男女の特質

一方には天才あり、俊才あり、他方には低能あり、白痴あり、其の差別一にして足らず。中にも強度の低能及び白痴に至りては身體的方面に於ても多少常人と趣を異にせるものあり。例へば胸部の扁平、頭蓋骨の畸形、腦髓の過大又は過小等一見して其の魯鈍なるを證するもの少しとせず。

男女の特質 男女兩性の心理上の特質を擧ぐれば、知力に於ては、男子は思考力に秀で、女子は記憶特に機械的記憶に長ず、従つて語學の習得は女子の甚だ得意とする所なり。感情及び意志に於ては、男子の發動的なるに比して、女子は感受的に、男子は意力を以て勝り、女子は感情に富めり。従つて、剛毅果斷は男子の徳にして、温順貞淑は女性の美なり。又男子は自己を主張すること強く、容易に外圍に順應せざれども、女子は之に反して、適應比較的速なり。

人格

人格 人の精神作用は其の内容頗る複雑なれども、又其の間に一定の統一を保持して相連續し（第一篇第二章）加ふるに是等の活動を一々「我が精神作用なり」と自覺す。この自覺を**自我意識**といひ、一切の活動が自我意識によりて統一せられたるものを**人格**といふ。即ち人格とは知識、感情及び意志の統一せる状態に名づけしものにして、先に述べたる個性とは畢竟此の人格を個人的差別の方面より見たるものに外ならず。兒童の個性を善導し、夫れ夫れ個性に應じたる最良の人格を完成し、各其の天分を全うせしむるは是れ實に教育終局の目的とする所なり。妄りに個性を抑壓する教育は之を個人の方面より見るも、將社會の方面より見るも、共に策の得たるものにあらず。

